

316

157_r



始



316-157A



昨
夢
紀
事
第
一

大正
11. 9. 15
内交



中根雪江翁肖像



六時日此新卒あつて

とては終つておつて

あつてはあつて

明治己巳秋

朝廷特加賜臣師實

祿秩蓋

睿感追賞昔日微

勞也師實不堪憲

汪之至恭賤

風雲際會是英雄
王業新成論曰功
已擲簪纓撫藁
益何圖
恩露及微躬

甯江中丞師贊拜

昨夢紀事

緒言

一、昨夢紀事十五卷 福井藩主松平慶永(春嶽)ノ股肱ノ臣中根師質ノ日記ナリ、昨夢紀事ノ名ハ「いざや世に語り傳へむ中たえし昨日の夢のまさしかりしを」ト詠ジテ筆ヲ執リシニ由レリ、嘉永六年六月三日、墨艦浦賀ニ渡來シテ國家漸ク多事ナラントスルヤ慶永身ヲ挺シテ其難ヲ拯ハント欲シ、且西城建儲ノ議ヲ提ゲテ國事ニ周旋ノ端ヲ爲セシヲ以テ筆ヲ六月四日ニ起セリ、其主トシテ國家重大事ノ記載ナルコトハ、安政三年三月福井歸城ノ條ニ「公の勵

精圖治、諸有司の軌掌勤勞實に目覺しき形勢なりしが、其事は諸局の記録に詳なれば爰に略して例の天下に關係せる御往復等を次々に專と記し侍りぬ。トアルニテ明力ナリ、凡シ米使ノ渡來ヨリ海内鼎沸、開鎖ノ諍議、水藩正奸ノ紛紜、而シテ阿部閣老ノ卒去ト共ニ幕閣懵々トシテ中心ナク、大奧ト紀州派トノ結托ヲ經テ井伊直弼ノ擡頭トナリ、朝幕ノ交渉、西城問題ノ葛藤、幕水ノ軋轢ニ至ル迄、時運ノ紛糾ヲ詳述シテ安政五年七月五日ニ終ル、皆以テ後年戊午ノ大獄ヨリシテ櫻田ノ變ヲ馴致セル經緯ヲ明ニスルヲ得ベシ、併モ慶永ガ最有力ナル水戸派ノ推挽者トシテ、水齊昭ノ起立ト一橋慶喜建儲ノ事ヲ、周旋慫慂至ラ

ザルナキ運動ノ表裏經過、及失敗ノ跡ヲ記述シテ餘蘊ナキヲ以テ、嘉永安政ノ際ニ於ケル史料ノ權威トシテ史家ノ典據タル所以ノモノ、決シテ偶然ニ非ラザル也。松平侯爵家ハ特ニ本會員ニ限り本書ヲ印刷頒布スルヲ許サレ、且松平子爵家ノ春嶽公記念文庫ニ於テ、原本ニ據テ校訂シテ、明治二十九年ノ活字本ノ失ヲ正スコトヲ諾セラレタルハ、共ニ本會ノ深ク敬謝スル所ナリ、カノ活字本ハ印刷ニ附スルノ際妄リニ作爲添削シタル所アレバ原書ノ故態ト相距ル頗ル遠キモノアリ、本書ハ一ニ原書ニ從ヒタルヲ以テ其價值ノ前者ニ羸ルコト數等ナルヲ知ルベシ、若シ夫レ慶永中根師質ノ詳傳ヲ求メバ、昨夢紀

緒言
事以下悉ク其ノ記傳ト見ルベキモノナルガ故ニ凡テ省
略ニ從ヘリ

大正九年十一月

日本史籍協會

昨夢紀事第一撮要目次

第一卷

○ 癸丑六月四日墨船渡來	二二
○ 五月七日水老公へ御問合之御返書	二三
○ 七日福山侯へ御書通	二九
○ 八日水老公御往復書	三一
○ 十二日福山侯同	四七
○ 廿三日將軍家御不豫に付福山侯へ御書通	五四
○ 七月朔日墨國書翰諸侯へ御渡意見御垂問	五七
○ 四日水老公隔日御登城被仰出	五八
○ 廿一日宇和島侯密使參上 <small>以下畧シテ字侯ト書ス</small>	五九
○ 廿二日建儲思召立薩侯へ御密議	六四

廿九日墨國書翰之儀に付御答御建議

六五

八月十日御建白之儀に付福山侯へ御示談

八二

十五日水老公へ内戦外和御往復

八四

十八日福山侯へ和戰御疑問御書取被遣九月四日御報

八九

十月福山侯へ海防之儀御建議

九六

十一月朔日御武備未整に付異船平穩之御處置之御趣意被仰出

九九

第二卷

正月十二日墨船再渡水老公御往復

一〇一

十五日於營中水當公と御應對老公と御往復

一〇三

十六日御固場被仰出十九日御場所替

一〇八

廿二日江川太郎左衛門覺悟

一一二

廿四日水老公御往復

一一三

二月朔日野村淵藏夷情探索

一一九

八日神奈川形勢内外齟齬御同席御會議

一二五

十八日廟算密議并應接一變

一五八

晦日御建議御草稿福山侯へ御相談三月四日御報

一七三

六月八日宇侯より御來書尾水件

二〇〇

七月十八日同斷水老公御對話件

二一九

八月十三日廿三日同斷英船渡來件

二二五

九月廿一日大坂港へ魯艦渡來に付種々

二三二

十一月四日大地震に付福山侯へ京師御警衛御願之御内談

二四三

第三卷

二月三日福山侯へ爲御相談御使中根敦負出府

二六一

三月十六日公邊御軍制之儀に付水老公御返書

二六九

五月十日外國人之儀ニ付水老公御意見御書	二七三
廿三日福山侯御招請之節外國事情御密話	二七七
七月朔日薩侯墨使應接之御内話	二八〇
八月十一日外國條約書御渡測量船之儀御達	二八二
十四日水老公隔日御登城被仰出	二八四
廿八日福山侯大奥ニテ御對談之御手録	二八六
九月十一日水老公より御垂問ニ依テ被及御國評	二九〇
十月九日佐倉侯加判上座 <small>以下畧して櫻閣と書す</small>	二九四
十一日御國評負擔鈴木主税出府	二九五
十六日水老公御垂問之御答書	二九六
廿六日福山侯より御建儀之御報	三三四
同日薩侯へ事務御相談御報	三三六
十一月五日櫻閣へ御建白	三三八

八日水老公御返書中御家臣奸物件	三四三
十一日薩侯御持參福山侯御密書御内示	三四九
廿八日同侯御内書御建白に付ての御意見	三五四
同日時勢ニ付御國御家老共々の御書	三五九
十二月十一日水老公御往復	三六六
十三日時勢御不審ニ付薩侯御往復	三七一
十六日同邸御内話	三七八

第四卷

正月時事御慨歎十六日水老公へ御質問書同御答	三九一
二月廿三日福山侯丸山之邸にて御對話	三九九
廿八日於營中水府當公より御家政御相談	同
同日夕桑山十兵衛を水府御家老武田伊賀へ被遣	四〇三

五月二日之東報に水老公より櫻閣へ國學の儀御建議御書面

御相談

四三〇

十日之東報字侯より水府件御報知

四三九

十五日北發脚に字侯へ水老公件

四四五

七月四日之東報水老公より當公を毒殺の好物有るを御密告

四五五

十一日之東報字侯より水府内亂件

四六〇

廿日之東報薩侯より同伴并橋公簾中件及御實母より同伴

内情申上

四六六

九月五日之東報字侯より水橋閨門醜聲

四六九

昨夢紀事第一目次終

中根雪江墓表

余嘗主越前時。謀議之臣。不乏其人。而參豫機密。應對四方。以贊治化。能使余盡藩屏之任者。獨有中根雪江焉。雪江天資沈靜。寡言。愛材容人。其處身節儉自守。粗衣短袴。非敗不換。性好學。於書無不窺。尤留心邦典。壯年負笈東遊。師平田篤胤。從遊有年。喜主張尊王之說。後雖在劇職。鉛槧無倦色。其詞賦唱酬。直吐肺腑。不事雕鏤。嘉永六年夏六月。亞墨利加合衆國使船至浦賀港。要求通商。邊境繹騷。幕府命列侯議防海。時雪江在江戶。當路之人。就以諮詢焉。雪江詳述利害得失。無有所遺。其言皆中肯綮。聽者無不歎服。由是雪江名益顯于世。慶應末年。幕府還政之議起。廷議徵集列侯及有志諸士于京師。遍問

意見。時雪江亦徵拜參與職。明治元年正月爲徵士。屢往來京攝之間。料理庶政。尋管驛遞租稅等事務。皆始就端緒。其罷職還鄉也。辱拜龍顏賞賜以物。二年九月特勅賜祿四百石。三年四月余家亦頒給賞典祿百五十石。於是買田宅於城北坂井郡。以爲投老之地。暇則弋山釣水。優游自適。若不復知世務爲何物。今茲十年春。雪江上京謝恩。尋來東京。滯留經月。偶罹疾。遂死于寓館。事聞內廷。宸悼之餘。賜金若干以助祭。嗚呼雪江好講實學。蘊蓄深遠。遭遇明時。以施之事業。終成其功。可謂死有餘榮矣。其子牛介具狀來乞余文以表其墓。雪江名師質通稱。雪江晚年所號。其先出自從五位下讚岐守平忠正。曾祖衆美。祖衆久。父衆諧。母平本氏。以文化四年丁卯

七月三日生。天保元年庚寅十月襲家祿七百石。歷仕諸職。明治十年十月三日。年七十一以死。配荒川氏先死。繼室水谷氏三男七女。嫡卽牛介荒川氏所生。次日西一側室小澤氏之出。三女嫁人。餘皆夭。

明治十年十二月

正二位源慶永撰併書

從一位勳一等松平慶永公篆額

君諱師質通稱鞆負雪江其號也。晚年以雪江爲通稱。曾祖衆美。祖衆久。考衆諧。妣平本氏。世仕越前藩。食祿七百石。其先出于從五位下讚岐守平忠正云。君以文化四年丁卯七月三日。生於越前福井。爲人重厚寡言。常慨家國之事。惓々弗措。少壯負笈遊于平田篤胤之門。汎通經史。最精古典。屬文賦詩。及和歌。皆自肺腑間流出。咄嗟成草。不毫加雕琢。人莫能及焉。弘化中藩主春嶽公大欲釐革藩政。舉君任參政。時太平日久。上下恬熙。奢侈相尙。君與執政本多敬義。近侍頭鈴木重榮。協心畫規。獻替。振學政。繕軍備。崇儉財。理。勸醫術。播種痘。士風丕變。遠近賴之。癸丑歲米艦來乞開市。物議沸騰。時幕政漸衰。人心乖

離。公憂慮乃與尾張侯德川慶勝、薩摩侯島津齊彬、土佐侯山內豐信、阿波侯蜂須賀齊裕、宇和島侯伊達宗城及幕吏岩瀨忠震、川路聖謨等相謀欲定儲貳以繫天下人心。屢草意見而上之。復遣橋本綱紀于京師。就青蓮院宮及鷹司太閤三條內府諸公有所陳述。君實爲參謀。事聞幕府。公獲譴幽閉。綱紀亦下獄。君自分一死。而得免。人以爲天幸。初君專唱鎖攘之說。而後迨與橋本綱紀橫井小楠論之。幡然有所悟。以爲方今時勢非大修外交。互通有無。以講富國強兵之術。則不能挽回國勢。而比肩于海外諸強國矣。會公因 勅旨再起爲總裁職。君首進尊奉 王室之議。務謀公武一和。以靖國難。入則鞠躬黽勉。參助機密。出則接四方賢士大夫。以解紛排難。晝夜不休。其忠

摯蓋天性也。在參政前後廿一年。其間于役京師及浪華九回。于役江戶十五回。雖處劇務常不廢筆硯。所著有昨夢紀事十五卷。再夢紀事二卷。丁卯日記二卷。戊辰日記五卷。奉答紀事三卷。及其他若干卷。維新後任參與凡五閱月。而辭歸鄉里。卜宅于宿浦之濱。名曰松陰漁屋。烟蓑雨笠。漁釣自娛。幾若與世遺者。先是 朝廷錄功賜祿四百石。福井藩亦給祿百五十石。明治十年一月。天皇行幸西京。君出而謝恩。特賜拜謁。尋赴東京淹留數月。以是年十月三日卒于真崎寓館。享年七十一。葬于品川海晏寺松平氏塋域之次。私諡曰堅磐松陰命。內廷賜祭祀料金五十圓。公親撰墓表。後八年特旨贈從四位。室荒川氏先卒。有三男七女。長牛介嗣家。次西一別成一家。二女適

人餘皆天。予與君締交非一日。復平生深躋其行義。不可以無一言也。銘曰。

明良相遇。從古所難。進規左右。納箴晨昏。

仰翌皇猷。俯翼私藩。名垂竹帛。福及子孫。

攀龍附鳳。世豈無倫。冥鴻千里。是爲絕羣。

明治二十五年六月 海舟勝安芳撰併書

いさや世に語り傳へむ

中たえし昨日の夢の

まさしかりしを

うめき出て筆を執り初めつれば此を昨夢紀事と

なむ題し侍りぬ

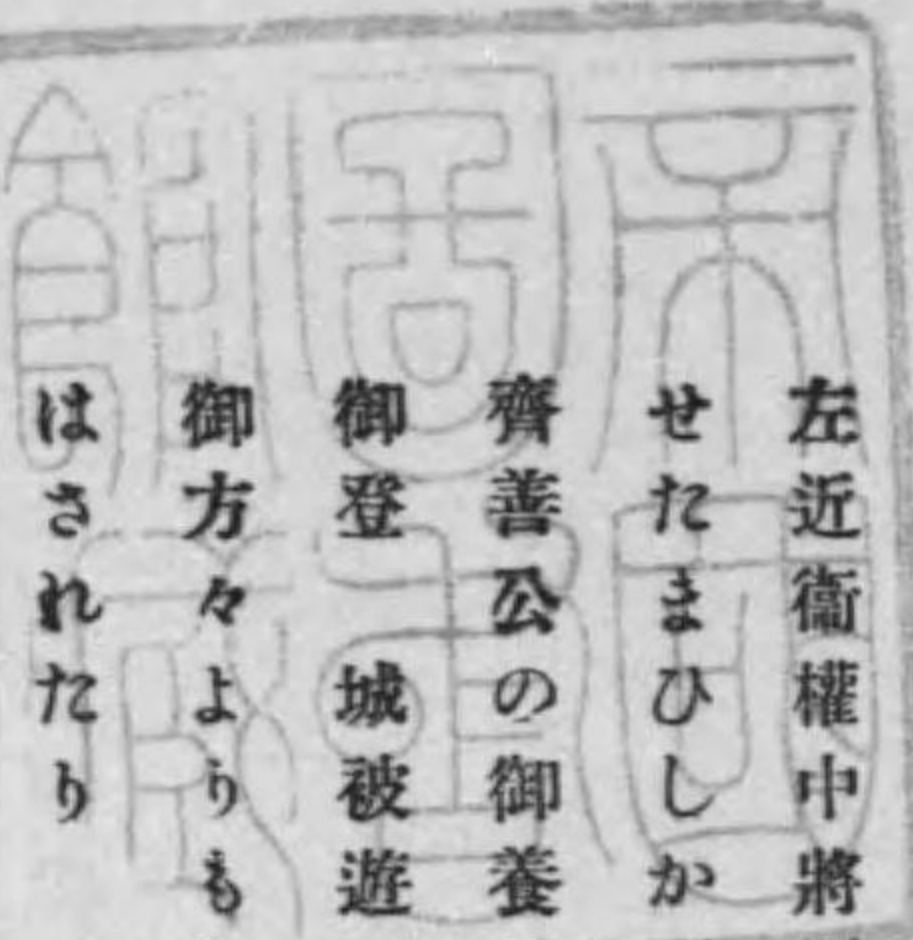
萬延元年六月

中根 毅 負師質



昨夢紀事

叙言十條



左近衛權中將源朝臣慶永公と申奉るは 田安一位齊匡卿の御六男に渡ら
 せたまひしか天保九年戊戌九月四日御歳十一歳にして 台命によつて
 齊善公の御養子とならせられ同年十一月廿三日田安の第より 御本丸へ
 御登城被遊 恭廟 慎廟より御大小の御刀を初種々の御賜はり物あり
 御方々よりも夫々の御贈物御頂戴夫より常盤橋の邸の御館へ御引移り遊
 はされたり

公御蚤歳より穎敏慈善の御賢徳被爲備御家督を継かせられし御若年の昔
 よりして御政務の筋に御心を被爲碎人倫を正し風俗を厚ふし文を脩め武
 を勵まし節儉を尙ひ奢侈を戒め給ふに悉く御躬行の餘に出すといふ事な
 しされは御初入以後數十年士民課役の憂苦を忘れて鼓腹の樂を極め貞享

己來百數十年御窮迫なりし御勝手向も漸くにして量入制出之御勘定の立たる杯は其御事業の盛大なる者にて其他の御言行の善美は舉世普く見聞し奉り既に福井鑑松の下露など題して御事蹟を記せし物世に流布せり是は何國の人の記せるにや傳聞の謬りなきにしもあらねと海岸の御巡見被仰出たる御次第と御醫師共を試み誠めたまへる御事杯はあらぬ筋かれと其餘の件は少しつゝの異同こそあれ總て御跡形なき御事にはあらず御若年の御時すら斯く坐せしからに況て自是以來御盛徳のあらまはしは臣師實記し傳へすとも萬世に亘りて朽すへくもあらず御忠孝の御志深く被爲渡天朝を御崇敬あらせられ幕府を御大切に被爲思召御事共悉く御天性の御至誠に出て稱へ申奉るも中々思ある御事なり就中嘉永元年戊申五月田安の一位老公御病氣輕からざる旨申上の飛脚六月五日巳刻頃到着せしかは兼而御調らへありし如く御看病として御出府あらせられんとて即刻之御供觸にて同日申刻御發駕ありて晝夜の御分もなく急かせられしに尾

州起の驛に到らせたまひし時御大漸の御凶左右を聽かせられ罔極の御哀働に堪へたまはず御追慕の餘りせめては御棺をたに御拜遊はされんと夫より道を倍して御指急きなり折節五月雨の名殘降續きて川々の水嵩増り天龍川指支て遠州濱松の驛に九日夜より十二日曉まで御逗留あり又大井川も満水にて御心からずも遠州金谷の驛に十三日より御逗留七日にして漸く大井川を被爲渡夫より以東五十餘里を三日三夜に馳せたまひて同廿三日の夜明方に江都常盤橋の邸へ御參着暫く御休息ありて即夕御棺拜に被爲入翌廿四日の御葬送にも御値遇遊はされたる御至孝御勇邁の御儀共は人皆耳目を驚かして感歎敬服奉らざるゝかし又去る安政四年丁巳の夏松榮院尼公御病氣の御時も御看病の御次第至らせたまはぬ御隈なし已に御掩粧に及はせられ候ても御哀戚の御中かから御沐浴御斂棺の御事よりして御埋葬の御折までも悉く御自身の御差配にて始終の御孝道至り盡させたまふ故御身に附たる内外の人は申もさらなり御孝誼の御厚き

幕府の内廷を感動したまひ將在朝の諸老諸有司も舌を捲て感歎せざる事
かし素よりさる御本性に坐すからに自然と天下の重望に當らせられ萬人
の倚頼を受させたまひ御三家の御方々を初列國諸侯の御相談柱ありけれ
は御威徳の盛んなる事いふ計なき御事共ありき斯く世に勝れさせたまふ
御身に坐しましたなから安政五年戊午の秋に至りて幕府の御嚴譴を受さ
せ給ひぬ其よし定かあらねは世の人心の淺はかなる異み思ふ餘りに昔に
變りて有るましき筋の事なといひ騒くのみかは御内人さへ心得ぬ事も坐
せし様に言ひ思ふも多かり師質庸劣不才いふにも足らねと公の御養子
と被爲成盤邸へ御引移の砌江戸表に在番して御用取扱ひたりし御因みに
より其已來二十餘年異他の寵遇を蒙り奉り機密に勤職して公の御夙志
は不及奉申上御事業の御上までも飽迄窺ひ知りたるに此般の御冤罪ある
を見て知るへき今の世にすらいひ訛り論ひ僻むる事の痛憤に堪へざる而
已か後世に語り傳へんに如何ある筋になりもて行んも量り難ければ師質

か知りたる限り眞實の條理を記し残し秘府に納めて金藤の冊に比し當時
の御冤を雪めて將來の惑を釋ん事を思ひ起して筆を執り初めたるは安政
六年己未十一月七日にして其稿を脱したるは萬延元年庚申六月廿一日な
りき公嘗て御憂勞遊はされしは本邦數百年の昇平打續き全國の時勢自
ら遊惰驕奢之流弊に長し尙武の古風を忘れたる折しも近年外寇覬覦の情
状も有るにより此秋に當つて武備を嚴にし士風を振興せずんは神州の御
耻辱となりて神祖以降尊王攘夷の御盛蹟の御瑕瑾となるへき事もや
出來なん歟と殊の外御心痛思召されて幕府の御爲筋を思召附せられし
御折々には都度々々閣老衆迄仰立られし御事ありしか嘉永癸丑の夏北亞
米利加の使節船渡來して幕府に於るても開國已來の御大事となりた
れば公も御心身を抛せられ日比に倍して御精忠を被爲竭將此御折柄よ
りして西城の御事をも思召立せ給ひし御事あれば御事蹟を記し奉るに
此癸丑の年よりして筆を起し侍りぬ

此比閣老の全權福山侯阿部正弘勢は幸ひに御近親にも坐せし故 幕府の御
輩は何に付ても御心隈なく仰合されしかは侯も 公の御誠忠の御程は殆
岫甘心ありて頼もしき人におほし交し給ふ御事ありき此侯は温厚良善に
してまかも才識宏遠に坐せしかは御歳廿五にして濱松侯水野越前守忠邦革弊の
新政顛覆の後に丁り閣老の執權に庸られ衆を容れて能人才を舉げ用ひ給
ひし故人の思ひより奉る事雙ふ方なき御勢なりき總て寛優和平を専らと
し給へる故に外國の事件などに就ては無斷の失策も坐する様に申なせし
條々もありしかと此侯の坐せし程は 幕府の御威光も重りかにて諸侯も
服従し天下靜謐ありしに此侯失せ給ひし後は 幕府の御事も外國の事共
も歲月を経すして穩からずのみ成行ければ此侯の宰執の才德雙ひかく坐
せし事は失せ給ひての後の有様にて世人も初て思ひあたれる事なりけり
水府老公水戸前中納言齊昭卿は御家督御相續の頃より不世出の英主に坐する由御
名譽拔群にして天保の末年に至り 幕府の御重賞も有之天下の重望依頼

に當らせ給ふ故 公其比はいまた御若年には在しかと深く其御德義を慕
はせられ天保十四年癸卯御初入あらせらるへき已前態と被仰入御對顔あ
り御初入の上御治國に付要領たるへき御垂諭を請はせらる其節御持參遊
はされたる御推問の御々條書如左

- 一 國主身持心得方之事
- 一 學問之致様之事并家中之者學問勵まし様心得之事
- 一 武道修練之事并家中之者武道に向ひ候様引立方心得之事
- 一 家老共あしらひ方心得之事
- 一 諸役人同斷之事
- 一 近臣使ひ様之事
- 一 外様之者親み様心得之事
- 一 百姓町人憐愍方心得之事
- 一 善人を見出し不善人を見分候心得之事

右五月十三日御持參よる御指出なりしに同十八日老公よりの御答如左
一天朝公邊へ忠節を心懸内は士民撫育之世話外は夷狄奸賊防禦之手當
可爲肝要候諸事仕置之儀悉く衆議を遂候上にて號令の一たび令し候
事は國主といへとも一切違背有之間敷抑太平之世に生れ一國の主と
相成居候事誰の賜に可有之哉日夜報恩の念無間斷候は、身持心得方
之儀大なる過失有之間敷歟

二學問之儀は人の人たるゆゑを明にするを肝要と致し次には禮樂弓
馬書數等皆學問にて候へは文武之道皆學問と奉存候處今世にては讀
書而已學問と心得候は如何之事に候古今之得失人情世態等に通せむ
か爲に書を讀候は大益に候へとも字義訓詁之異同詩文章之巧拙等に
心を用ひ甚しきに至候ては 本朝之事は捨置西土に悉しく空論のみ
にて實用無之は書に讀まれ候とも可申歟兎角學問は 本朝を本とし
西土の道を羽翼と致候儀肝要と存候御家中之儀も右に准し武士道に

違ひ不申候文道武道一致と心得候様致度事歟と奉存候

三治不忘亂の古訓常々御心に被懸候は、自ら武道の御修練も御手厚に
可相成候乍去太平の世容易に干戈を動候には憚ある事故拙家にては
近來逐鳥狩取行ひ軍旅の調練を寓し候處御家にては舊來馬威し有之
由に候得者尙更調練之意を御加へ永續之御仕方有之候は、天晴非常
之御備も相立可申候御家中之儀は文武共に國主にて好み夫々御賞罰
有之候は、自ら引立可申候號令のみにては何事も行はれ兼候半且士
道の穿鑿は御家中にて著述之初心集杯實に感し入候事に候拙家にて
は城中番所々々へ着具預け置長日坐睡之代りに折々着用爲致候事に
候處近頃經書并右初心集一部つゝ番所々々へ預け申候乍小事御家中
にて出來候書の事故御吹聴申候

四重役之儀元より人物御撰にて被命候事故何分御叮嚀に御扱ひ御尤
に奉存候左様無之候而者下々の用ひ不宜様奉存候尤言路塞り候へは

國主の威權皆重役に歸し候間言路は悉く御開き存意有之者は如何なる卑賤之者にても言上相成候様御仕向可然言路の開け候を不好者は賢良之重役とは不被存候

五前件に准し夫々相應之御あしらひ御尤に候諸役人連も御撰の上にて被命候事故折々は御側近く召て其職々の事御尋に相成候へは人々も勵み候のみならず御心得に相成候儀も可有之歟

六近臣之儀は警衛の爲に候へは武勇の人御申付は勿論に候得共無學不文之ぶこつ者のみにても御差支可有之候得者文武之士御召使ひ聊依怙なく御引廻し被成候方と奉存候兎角役人と近臣之風儀は國中へ移り易きものに候へは風教の害に相成候様なる人物は左右御近付無之候而可然歟

七外様の者御親み様は文武にて御親みの外有之間敷候文武御覽之儀は定て御舊例も有之外様一統御覽被成候事と奉存候拔群絶倫之者は内

密御搜之上不時御覽被成且は藝道の意味等御尋被成候類且又花晨月夕杯詩歌に事寄せ文人をも被召賜宴にても有之候は、技藝之巧拙のみならず其内には作法の善惡等も御分り可被成歟實は外様之者逆も同じ御家中之事故一圓に御親み可然事之様に候得共不文無武之者迄御親みにては際限も無之殊には無能の士を御親み被成候へ者有能之士之怠りに可相成歟と奉存候

八農は本商は末に候間商を賤み農を貴ひ商を減し農を殖し候御仕向け有之度事に候得共當今之時勢一國限にて行はれ兼候事も相見へ候處其御心得者有之度事と奉存候扱國主始百姓の辛苦にて命を保ち候事故憐愍之儀は勿論に候得者何分膏血を絞り不申様致度事に候乍去民の事は緩し候得者大切之士を養ひ候事も不相成候得者定法之通りには必收納申付可然筋に候百姓は愚なるものに候へは一度姑息之仁を施候得者恩恵に泥み後には害に相成事も有之もの歟と奉存候

九此御ケ條第一肝要之儀に候得共堯舜も難しとする處に候得者思味之拙子杯中々書取も致兼候此御ケ條さへ御間違無之候は、前件の條々は自ら御行届に可相成歟と奉存候

過日者始て御出之處紛冗中何之風情も無之失敬之事に候扱は其節御持參之ケ條書尙又致熟覽乍不及御好みに任せ愚意相認候へとも乍憚御養子之御身と申且初て御入國之事に候得者急に御改に而萬一御手違等出來御觸事かはり候様にては以の外不宜候御先代よりの法令等は假令舊弊なからも人々安し居候へは御改正之上に而御不當出來候ては御濟不被成候故諸事能々御見留之上御發し扱御發しに相成候からは始終御押通し被成候様有之度當時之御年齢にて右之如く御國政に御心を被用候段は實以感心致し候此上無御間斷候は、如何程の御事業も容易之御事と乍憚御頼母敷奉存候御發途も近々之由承居候處今日又々承候へは明朝之由故認可申奉存候處登城等用向多く夜に入認かゝり前後之儀も可

有之落字等も不少と奉存候よろしく御推覽可給候扱又不順之時候御旅中折角御自愛專一に奉存候也

五月十八日燈下認

二白拙子事も一昨十六日登城如先例御暇相濟候處昨日又々上使にて今日登城之處於御座之間御對顔御懇之御意を蒙り御手自ら御傳來之御太刀等品々拜受不肖之身不堪慚愧奉存候序故御吹聽申候早々

松平越前守殿御報

水戸

是より以來は公にも父とも師とも御頼思召たりしに天保甲辰之夏卿は幕府之御嚴譴を蒙らせられ御閉居によつて其砌は不及申其後も御對顔之儀は弗に御斷りたるにより御書通を以て天下國家之御事も外寇禦備之御心掟等も問ひ質させ給ふ事數度なり卿にも公の御誠意を殊の外に御甘心ありて御返書之折には申も更かり御心付せ給ふ御事は彼御方よりも時々告來し給ひて親しく懇にせさせ給ふ事一橋殿刑部卿因州侯相摸守川

越侯大和守館林侯民部大輔等の諸公子とひとしくものし給ふ故 公も愈益愛敬之御至情を盡させ給ひて 天朝を御崇敬 幕府を大御切になさせ給ふ御事も専ら此卿を模範となさせ給ふ程の御事ありき乍併 公にも追々に御年も召させられ御學術も長しさせ給ふ故に近き頃に至りては卿にも別而頼もしく思召由にて天下の御大事に付 幕府へ御建議をとせさせ給ふ御事などにつけても 公は如何思召とて問ひ調へさせ給ふ計の御事とも、座したりき然るに前にいへる米利堅使船渡來之頃より老公海防之御掛り被仰蒙其後御政務筋にも御參謀可有之旨にて天下之囑望も日比に倍し給へは 公にも猶更思召付せ給ふ御事共は兩端を竭して被仰進たる御交誼の類ひ坐せさりし御事は本文記し侍る條々にて推測り奉るべし一橋殿刑部卿の御事はまた幼くて彼殿に渡らせ給ひしなれば其頃は 公彼御方へ御入あれば 公の御前にて手書き物讀みなどし給ひて忘れ給ひし條々とは 公にならひものせさせ給ふ程より親敷せさせ給ひて 幕

府の御事も御私の事も隈なく申かはさせ給へり此卿の賢明世に比ひなく坐せし御事は次々の本文に記し侍れば爰には略しぬ此外水府老公御息達にて因州侯相摸守川越侯大和守杯は 公を御兄君とも頼み給へと老公の申教へさせ給ひて殊更に親み睦み給ひし御事ありき

阿州侯松平阿波守齊裕は御身柄といひ御長者といひ 公にも人よりことに御敬禮有り候にも 公を頼もしみ親み給ひて睦み交らせ給ひしか少し御心軽く坐する御本性なりければ 公にも至り深き御事柄になりては御遠慮ありし御事ありき

薩州侯松平薩摩守齊彬は御大身といひ謀慮深遠英邁にして奸雄の才逞しき御方なりければ列侯を初閣老衆とても畏憚せずといふ事なし 公よりは二十計の御長者なれハ 公にも棄がたく頼もしく思召て御若年の頃より殊に親しくせさせ給ひ候にも大方ならず 公を依頼し給ひて天下の事も國家の事も互に謀りものし給へり易簡にして明斷に座せし事は御書通之上にて

も推て知らるゝなり又宇和島侯伊達遠江守宗城も蚤くより御念比にて薩州侯と同
し様に何事も申かはさせ給ふ此侯は宇和島老公の目鑑にて小身より出て
御養子となり給へる故能々下情にも通し文學の筋も心得給ひ特に辨才あ
る御方にて忠良英敏 幕府の御爲を思召入たる事は薩州侯と等しく 公
に次てものし給へり御年頃も 公に十足らすの御年増なれば御兄弟とも
いへらん様にとり別て御入魂ありき御互に御在國の節には關東の形勢坏
は御見聞の次第を御申かはさせ給ふされと薩州宇和島兩侯共に御參勤の
御年並違ひて御交替にならせ給へは春夏の交際御雙方暫しの御在府の程
に行き通ひ給ひて御在國中に御書翰には及ひかたき至り深き事共杯を被
仰合たるは例の御事なりこの外に土州侯松平土佐守豐璋是も前の兩侯と同じく
御參暇の御年次違ひたれば是迄は御疎遠なりしか去る丁巳の年は此侯御
滯府にて 公と御相詰とならせ給ふに兼て學才ありて卓犖英發の聞わあ
る御方なりければ 公事を御會讀に托せられ友垣を結はせ給ふに忠直に

して義に勇み給ふ事類ひなし御齡も 公と御同年に坐せは 公も一良友
を得たりと喜はせ給ひ彼侯も公の御厚誼に感服し給ひ刻頸の思ひをなし
給ひて御敬重淺からず彼殿人も 公に交らせ給ふ以來は内々の御行状を
慎ませ給へる由にて全く 公の御薰陶によれるなりと師賞杯にも語り出
て歎ひあへり以上の諸侯は御交り特に深くして共に天下の事をも謀議し
給ひ 幕府へ忠貞を竭し 公と休戚を同うし給ふ御方々にて 公の御事
蹟に就て關係最多き故に其御交誼の荒増を記し侍るなり此餘侯伯諸有司
の中にも御同志の方々も多かれと夫は其處々に記し出せり凡當時の列侯
を初御旗本の衆中御家人の輩諸藩臣并草莽の士に至るまで少し志ありと
見ゆる限りは皆彼方より服従せし事なれば御親敷御心易きはいと多けれ
と要なきは記し侍らす

水府老公の御往復を初諸侯の御書翰諸有司の呈書の類是によつて天下當
時の形勢を考察すへきものは 公の御事業に關係せさるも記し侍るもの

多かり

總て幕府の御爲にし給へるも又御内々の事共も史官の記録に在つて人の知る所は大事といへとも記載に譲りて漏し唯公の御盛意御事業の帷幄に在つて世に知られず埋れぬへき事は大小となく知りたる限りを擧て記し侍るなり

昨夢紀事叙言終

昨夢紀事第一卷

墨船渡來

嘉永壬子の夏肥前國長崎港へ入津之和蘭加必丹より北亞墨利迦國より使節の軍艦渡來すへきの風聞ありと申立たる由同年の冬の頃御國許此節御國へ聞わたれば兼而の御先憂も既に實地とあるへき時勢となれる故猶更御惱慮あらせられ御公私に付而之御心得方共數々福山侯へ御往復あり翌年癸丑四月例之通り御參府有りしか六月四日の朝に至り異國船四艘相州浦賀港へ渡來の風説あり午後に至りては北亞墨利迦國の軍艦なるよし定かに聞えて幕府を初諸藩邸并都下の騷擾大方ならず今にも戰鬪出來たらん様に騒き匂りたり同日申の刻計りに福山侯より御内々にて御家老山縣三郎兵衛を召され於大奥御逢ありて仰けるは此度渡來せし異船は是迄に事變りて容易ならざる趣にも聞ゆるなれば時宜によりては諸家の人數も

指出さへき旨仰出さるへければ其節は御手支なく早速御出勢に及はるへし左あらんには御家の御外聞は勿論にて福山侯も御面目に思召の旨いまた密々の事なから外ならぬ御事ゆゑに御心構への爲め御申聞の由なれば三郎兵衛申上しは御出勢の事は唯今にも御差支は候はず候か公には兼々驚波御大事とあらんには是非御出馬もあされんとの思召にて候此度杯は如何心得候はんやと伺ひたるにしか御心得ありてよかるへしされと今日は極密の事なれば要路の者共の外へは泄れざる様にすへし何れに當月は備前守より内意申入へければ夫よりして打はれてものすへし御出勢の事は又別段に指圖あるへしと仰けるとそ三郎兵衛罷歸て其由申上ければ公聽召てさそあらん豫て調らへ置きたる如くにすへしと仰ありて夫々御支度に及はれしなり異船の事は猶追々に聞ゆるさまは使節國書を持參して御請取あり度よしを申立其事彼是と指縫れたらんには兵端にも及ふへき勢ひあるよしにて世の中も騒々しく幕府も以の外御混雜のよしなれ

は公にも斯る時こそ思召さん様こそ坐すへけれど御心掟のほとを水府老公へ問ひ聞わさせ給ふに同五日左の如く御返答あり

六月四日封之貴書今五日朝相達忝令披閱候拙老儀も昨四日夕異船渡來之儀承り申候右は三日霧深く八ツ時頃晴候處浦賀湊觀音崎へ四艘着船有之由一昨年入船のイキリス船と形同斷之由に候右は同所より直に申來り候事故無相違儀に存候其外五艘又六艘杯と申説も承候へとも是は全く道路の説に被存候八艘云々の事も兼て聞及候得者追而は追々來り候も難計候得共三日に渡來候は四艘と存候無人島邊へは參り居候かも難計候へとも三日には四艘のみと存候摸様に寄り段々と船を増し此方動靜を見候計策は可有之と被察候

右に付而者兼ても御嘶申如く苟安姑息の御了簡にて交易を御濟せに相成候歟又は少々の不毛の地にても御貸被遊候は、最早夫切されはとて今は打拂も機に後れ申候假令無人島にても蝦夷地にても貸との儀被仰

出候へは二度引戻は御六ヶしく是は不毛の地にて何も御指支には不相成様にても右がはしごと相成申候本より先にてても有用の地の願も致すまじくはしごを願候事と被察候萬々一にも當世態の事交易とか又は土地拜借とか御濟せに相成候へは徳川の天下は御六ヶ敷御座候打拂も不致交易も貸地も不濟良法も可有之乍然敗軍の將同様の拙甲辰以來は内々の事さへ御承知之通礫駒了簡行違ひ母子父子云々況異船の論處には無之兎角天下之安危に候へは尊慮次第可然御事と奉存候 尊慮にて徳川の天下を被失候は無已外より口出しを致し候て萬々一にも云々の節は恐入候ても間に合不申候事に候何も御答迄早々

六月五日即刻

尙々貴論之通り一旦過失出来候上は何良策も出来兼可申候當今にては拙老は打拂も不宜交易地貸は尙不宜と奉存候拙老は右之通りに御座候へは阿闍へ御申達候とも此儀ハ御含可給候尙又申候何ぞ委細之儀御分

り相成候は、承り申度候

眼氣不宜亂筆御推覽可給候

公此返書を御覽あるに老公思召旨は坐しなから自ら敗將と稱し給ひ幕府の御爲御鼎力あるへき御容子よらねは大に驚き憂ひ給ひ此卿かく坐しての幕府の御過失もいかゝあらん卿の仰する如く苟安姑息の御處置のみにては追々天下の御大事とも成行へしとおほし煩ひ給ふ事限りなし此夕長岡侯より聞老牧野備前守異船萬々一内海へ乗入事もあらは御警衛の御人數を出さるへしとの御内意あり

一六月六日とありては世の中いひ騒ぐ事いよく甚敷ありて幕府よりも内海へ乗入たらん時の心得どもなと御觸渡しある故都下の形勢も老を扶け幼を率て片田舎なる知方へ立退くへき様となりて紛擾いはんかたかく又廟議の密々に泄れ聞ゆる處にては國書も御請取となりて事立さらん様の御取扱ひとあるへきよしかれは水老公の憂ひ思召如くなるにやあら

ん斯ては如何すへきと猶又老公へ御書を被進天下の御一大事已に到來候へは御謙讓御引退之秋には有之ましく候への遮て御建議もあらせられんやふに仰せられたり

一六月七日には蒸氣船壹艘觀音崎を越て内海へ乗入たるよしも聞えて事彌迫り來ぬれば又々老公へ御同趣を被仰進たる御報如左

水老公返書

昨今兩日之貴書一覽致候云々何も承知仕候

一今日の貴書蒸氣船内海へ云々は全く動靜を試候儀にておびやかし願を叶へ可申策と存候昨日の御書中に願書御請取云々右は外も承り及候處於實事は何れにも六ヶ敷可相成候如何となれば近付候ては不相成由申候而も強而近寄候得者其分にて相濟又奉行の書翰を受取候は長崎にて無くては不相成由斷候而も戰爭に可及よし申候へ者受取候様にては此方の柔弱なる事直に見取候故如何にも六ツヶ敷可有之と存候右に付昨日書面のみにては行届兼候故不苦候は、昨日にても今日にても

登城の上勢州等へ面談可申と申遣候處今に何とも不申來候へ者愚老には聞候よ不及との了簡と存候尤五日夜には内々了簡有之候は、申聞候様阿部が申來候故一通りは申遣候へとも密策は認候儀も六ヶ敷故昨朝如前文又々申遣候得とも何等の沙汰も無之候へ者大方苟安姑息にて土地を御かし被成候歟又は通信交易等御濟せ被成候歟其他願之中一ツも御濟せに相成候事と存候處本願事は皆々終に日本を奪ふ梯に成候事のみと存候一ツ御濟せに相成候への又其尾に取つき追々此方の柔弱をあなとり色々申かけ終には戰爭に及ひ候は指見に御座候阿閣等にて早く拙老を呼候て面晤致候は、乍不及一昨年比の密策存候事も咄し可申處を願書も御取受に相成候上はチトわろく候へどもかゝる天下の御大事一寸面晤位は致候ても可然處是の不相成も時と諦らめ候外無之候彼よりは此方より手出を致候を待候儀故右之策にち候て打拂等致候へは浦賀等追退け候ても直に大島八丈等奪れ候は眼前に御さ候大島八

丈等御手當の上に無之而は只今と相成候ては容易に打拂も如何と存候
 密策は是とは別物に御座候願書御取受に相成候とても不殘御濟せには
 相成兼候儀に存候へも何れ六ヶ敷相成に相違有之間敷候最初御不策有
 之候へは仕直しは六ヶ敷候故肝要のよしも昨日阿部へ申遣候へとも知
 れた位の儀にて拙者を呼聞候事も無之事と見え申候何れ拜見致居候外
 無之候模様によりては品川迄も乗入り候半と存候兎角此方より手出し
 を致候を待候て色々仕向け候事と存候昨夜鼠色の御扣へ御返し可申處
 今日返却致兼候寫候上にて御返し可申候也

六月七日即刻

二白惡暑随分御厭琵琶葉湯にても御用かよろしく候かゝる一大事の時
 に候へは老中へ不申直に登城致し逢候て咄候てもよろしき譯に候へと
 も此世態故左様も致兼さて困り申候事に候御答迄草々
 又申候大島邊八丈等取られ候へは兼て申候船無之候へは御取かへしか

六ヶ敷候

又曰昨日貴書の中に火事襲束云々時もなき事に候火事襲束と申物は兼
 て下官大嫌異船の固衛に出候ならば甲冑にて可然候又左程にも無之御
 見込に候は、野服の方よろしく此大暑に火事襲束不便利成計と存候第
 一火事の節さへ不用の襲束にて火方へかゝり候者は右様の品は用ひ不
 申候まして防禦には如何に御座候是にても世態相分り申候こまりたる
 事に候

公是を御覽して殆御憂悶に堪へ給はねと此夕は御警衛の御場所品川御殿
 山に仰出され殊の外御取込之御折柄にて御執筆の御暇あらせられざる故
 御側向頭取本多十郎兵衛へ仰せ書を被命是を福山侯へ被進たり其御書面
 如左

福山侯へ書

一翰致拜呈候大暑先々御清安奉壽候然は今度異船渡來誠に不容易儀に
 而乍恐實に天下之御安危にも關り候御儀晝夜不安寢食罷在候就夫事に

相成候にも御大事之御儀只々廟堂之御良策奉希外無之尤種々小生式相考候而も何も心付無之二百年之御厚恩奉報候心底は海山に候得共案法も無之恐入候御儀に御坐候將又今度御内意被仰出難有奉存候何時被命候而も最早差支無之候間乍憚其處は御安心可被下候右一件に付私策と申ては無之兼々如御承知駒込水戸前中納言殿には非常之御方故密に御呼寄御承りにても御出被成候而も御相談御尤に奉存候尤此節柄御繁用中故差扣へ申上間敷と存候得共天下之御爲を存付候儘黙止候而も罪人に付愚存之儘申上候尤廟策御多分可被爲在候得共心付候事故申上候此節之事故御返答は御斷申上候入らぬ事と可被思召候得共責ての存寄に御座候間何卒々々不惡御聞受奉希候所用而已艸々頓首拜

月 日

尙々此節別而御自愛暑氣爲天下に御座候何も用事のみ以上

又云御内意被仰出候前夜家臣内々被召呼被仰聞候事誠に忝次第御至懇

奉謝候前文申上候も御近親故不願憚建白申候以上

一六月八日昨夕御警衛之御場所を被仰出候砌長岡侯の公用人を御留守居之者へ心得として申聞せし此度御人數指出さるとも異人へ對したる儀は惣て平穩第一たるへし假令上陸に及び薪水を取るとも手指はよろしからす萬一鐵炮等を打懸亂妨の体に候は、其節は不及是非候へとも夫共なるへき丈々は事穩に取計候様被遊度との台慮あるよしを物語られ候段御留守居共より申上たるに公御悲歎御痛憤の御餘り今朝左之通り水老公へ仰せ進せられしかは朱砂もて御即答御書入れ如左猶御別紙を添られたり

水老公トノ
往復書

密白昨夕被仰越候御密策は如何か難計候得共昨夜も場所被仰付候序台慮云々は實に恐入候と申も愚かにて末世とは乍申此度之事は御運盡と奉存候將に天保十二三年之比英夷清國廣東邊擾動仕候事有之其節は林則除阿烟を燒候より始まり及戰爭申候唐人書上には道光主震怒して

自分征伐あるへしと被命候處皇姪綿親王代りに出候事記載有之候兼々唐の英に窘迫せられ降參同様も〇〇此位之事は有之候然るを固め人數有あから水を汲候而も何ても穩便にとの事にて手差し不相成は切齒も歎息も扱置上は第一

（以下五行朱書）

越前家にて夷人の番勤候儀は御不本意御尤に候右位之事有にも爲任不申位に候は、出るにも不及候事歟只入用のみ費し其入用にて玉薬手當致候方宜と申者歟世態無已事に候

和漢之御引事至當之御論と存候此方にて穩と思召候處柔弱先へ響き候故尙々穩には參り兼候半歟

天照皇大神 天朝御代々 神祖御始御代々へ被對相濟申間敷實に胡元襲來候節北氏之舉動とは霄壤に御座候霄壤は兎も角も宋末明末にても合戦して亡ひ候は有之候得共敵之自由を見物は如何にも神代より有之間敷畢竟は

神祖櫛風沐雨之御艱難を數年被經漸く 徳川天下之萬世鴻基を御開被遊候御儀にて天下は天下の天下にあらずと申通に候得者一旦畏縮候とて 列祖之鴻業を一時に御墜落と申はいかなる御事に候哉將又御固メも藁人形出し置候方却而入費も無之宜と奉存候位固めの趣意は小生式心得居候は少人數にても乍不及上陸之處を打拂都下擾亂不仕様にいたし一寸一毫も外夷をして侮慢生し不申日本地踏不申候様に致候と計り存居候處無主意にては出陣を望候も更に無甲斐奉存候何ぞ御工夫も無之候哉乍憚家來共今にも戦争と勇氣加倍凜々討死は覺悟と申候處ケ様同ある事 台慮と申て申聞候ては却而不忠に付黙止頭分計り心得居候事に御坐候小生式家來末々迄右様之覺悟候を堂々たる 幕府之御良策不堪聽昨夜も餘りの事にて乍恐不相濟事に候得ともつら々々怨み奉り候位（以下二行朱書）朱點之處御尤に候頭分へのみ御心得させ置可然其中云々は必出來可申候貴臣にて何分勇氣くじけ不申様被成置可然候

神祖之天下にて乍恐 當公ニ御反正にては無之下々にても自分の調へ候品は如何程結構にても大事にも不仕候先祖之遺澤或は父母手馴候品に候得者殊更重寶いたし大事に致候物夫を夫とも不被思召候は乍恐如何成事に御座候哉と奉存候尤御固メ御人數ニ被仰出候ても中々一手にては難敵奉存候間所存にては諸侯旗本衆力を盡し防禦不仕候半而者難相成と奉存候貴慮如何

(以下一行朱書)
御尤千萬に奉存候

戰爭は猶更の事にて海上防禦は逆も難成上陸する處を巨礮にて破碎致度存寄上へ登り異人共軍器取揃候内見ておられ候や軍器揃候へハ六ヶ敷奉存候事貴慮如何

(以下一行朱書)
水汲み云々にては見て居候外無之様に候是等の儀御ヶ條書にて御聞置可然歟

八丈大島防禦私式分別出來不申候逆も御覺悟候は、屋敷のある處は致

方無之銘々存町家之分計り此方々燒拂候は、場所廣く相成可然奉存候貴慮如何

(以下三行朱書)
御尤に候乍然異人は此内地之戰爭と異にして町家燒拂候は、又外へ廻り又其處を此方にて燒拂はせ候様仕向は致し申間敷候哉臨時での了簡ものに候

右等心付候故奉申上候猶又 尊慮相伺度候愚衷出候は、又々可相伺候右は阿へ申遣度存候得共 台慮にて候へは、容易に難申出一人之私は牛裂に相成候ても事濟候へ共申上候而萬一トク天なくなり候ては恐入候事(以下二行朱書)
穩にと申處は 台慮に可有之歟汲候而も云々杯は中途の註と存候ヶ條書にて譬へは異人薪水取に上陸致候は、手を付不申様に御指圖有之候處見物致居可然哉付添之者遣はし可然は水を爲汲相渡可然哉杯馬鹿々々敷事ながら御尋にては如何何と奥右等御答可申哉是等は必ス可有も難計候尙又先々打候迄は此方々不打儀か先々打候ても此方

にて打事不相成儀か又先にて打不申共筒等追々陸へ上げ候様子も有之時は如何致し可然哉夫をも默見にて可然哉等御心得にも成ヶ條御聞可然歟實に面倒成事に御座候此炎暑に防禦にも無之物を費し夷狄めか番人同様にては難儀之事に御坐候迎も初る事ならば早き方可然遅く候は、警衛の人々も紋勞物も費へ可申候又永き中には勇氣もたゆみ可申穩にて事濟候得者恐悦に候へとも思召候様に計は何とも安心不致候扱又一寸のかれにて此度若々歸帆も候は、安心不致是非とも跡御備は鳴々迄も御手厚く被遊又諸國へ如已前打拂之御觸出候程に致度事に候猶又兼て拙老申候軍艦之儀も天下へ御濟せに致度事に候拙老申上候は天保戊より數十度に候處其比より御手當に相成候へは今程は十分御手當も出來候處此儀は今申候而もセンなき事せめては此度の事に御こり被成以後大炮も軍艦も天下に多く出來候様仕度事御座候天下の船之多く候へは如此度浦賀へ來候而も御觸廻り候へ

は諸國の船を浦賀へ入異船打立陸よりも打候得者前後左右より打れ候へは迎も浦賀へ入居候事は不相成候眼病中漸々相認申候御推覽可給候

台にてなくなり候は自分禍を招納する道理致方無之夫故一應相伺申候若戰爭に及ひ候ても枕城之 台慮奉願度 日光山へ被爲入候而は江へは再と御六ヶ敷奉存候 日光近々と誠に恐入申候多罪は申迄も無之亂筆御海涵奉希候頓首拜

八日

越前中將

慶

〆

悪暑無御障大賀存候扱は昨夜俄に勢州隠宅へ參り六ツ過にて歸りハ色々勢州よりも承り尙又愚存も申聞候事、御座候乍併察申候に苟安に落入可申候乍然夫も無據事も有之候

てんけつと違ひ申候へは何れにも指支申候なまじゐに事をあし外々よ

り 天へ達し てんより色々出候は、跡へも先へも參間敷御申越の御祈禱にても御察かよろしく珍ら敷佛風にても吹候かも知れ不申候一、密策も阿へ申事は申候へとも逆も被行候事は有之間敷仕とげ不申中に天風變候と如何とも可致様無之候へは策は有ても爲兼候事と存候様あるも時に可有之哉さて、心配いたし申候何も御書返進此だん申進候也直ニ御火中

八日

尙々遅早はとも格も一事起候は無疑被存候玉薬と糲米は何分今の中御手當かよろしく米には不限麥稗にても豆にてもよろしく今に高直に相成候へは御買入も御損と存候今の中可然事に候又御買入計に無之只今の中かかて食にても用候様いたし候は、高直に相成候而も夫だけは食延し可申譯合と存候御如才も無之事に候へとも心付候故申進候何程甲冑薬玉劔鎗有之候而も空腹に相成候ては用はちし兼候事に候御火中

水隠

越殿

右によりて猶又御返答かた／＼左之通り被仰進たるに御朱書并御附紙に御別紙之御再報如左

貴答書拜見如仰惡暑先々御清安奉壽候然は昨夜俄に勢州被出候由野生心底も相届爲天下奉賀候云々之御次第に而は御密策も不被行趣切齒歎憤申候只々苟安に落入候由

（此處御朱書御下紙有之如此）

愚老密策とて外には無之此度彌戰爭に相成候と御見抜の上は彼か申品に寄云々扱人も船も不殘取候而可然左候へは直に四艘は御船も出來夫へ積候筒も御手に入候故云々申候處相成たけは苟安にて御歸しの御評議にて中々拙老申事は不被用様存候且又唯今はたとへ右密策を被遊候にも 台慮伺候計には不相成海防懸りへも不殘談合其上に無之而は何事も出來不申候得者内々評議之密策も直に他へ洩れ出來

候事も出来損し申候又懸り一兩人にてのみ扱候へは他より打こわし半にて 天上より云々出候得者跡へも先へも不参事に相成申候故密策は有之候へとも不行事に候 台慮を云々に候へは何事も出来候へとも申さば人次第と申つり合左候へは衆評之上と申より外無之於文面は衆評と申候得者聞え宜候得とも衆評と相成候へは古役の舊むしなの了簡に落入新役は内心不同心にて云々不申ては不相成譯故無據古役之意に任せ候様成行候への衆評とは申なから實は衆評にも無之歟と被察申候丹石杯は兼て別懇と聞申候へのやん丸杯の意にて石も了簡致候者か左候へは天之通りも宜と見え申候

將又御追書に今度は是非事起候は御疑なきよし玉藥并糧米今の内に手當致候様云々何とも誠に以御至懇之御義奉謝候如仰空腹にては何事も出来不申候野生是非々々近年の内一大事可發と見詰候而四五年前を追々貯置申候事にて江戸にても餘程買入國許も當春中相廻置此間も又

少々異渡買置候間何も差支不申候玉藥も同斷之儀にて余程餘り候位に

て皆用意に持参候事に候一笑可申は此間西洋流之ガラナード玉大名の中を借り度由にて参候當時用意餘り有之候得共遣し不申候是等之爲体故御安心可被下候昨夕か今朝か 貴家か阿へ御書翰故と奉存候只今牧備へ留守居呼出彌品川御殿山へ詰候様人数引續出馬致し候様にとの事に御坐候先々安心仕申候彌上陸之事に相成候へは老中より直談と申事に御坐候此段も御承知可被下候定めし胡元之襲來の先例にて

(以下一行朱書)
牧備より云々相成候よし左様に相成候は大に宜敷此度計に無之以後人々具足の着様位は覺え可申又少しは常々のだらくも止可申歟

天朝よりは 伊勢へ奉幣と奉存候品々御書付共拜借難有奉存候明朝迄に返上被命候得共何時出陣被仰出候哉も難計に付今晚一覽後速に完璧仕可申候萬一命も有之凱陣後は何卒御取揃尙又拜見奉希候鼠紙之書付も同様其節御返却可被下候何も心事は海山に候得共只今被仰出にて外

々とは静にも可有之候得共何となく用多暮候間甚不厭乱筆御請御返却
旁艸々頓首不備

即

(以下三行朱書)

天朝は云々定而御聞も被爲在候は、奉幣云々と存候於此地は上野
御祈禱のよし珍ら敷世の中故佛風にても吹可申歟是迄聞及ひも無之
事に候少々たり共玉薬の御入用にも相成候へ、可然御事と奉存候

尙々時下爲天下御自玉奉專念候 天上之五日迄御承知無之は何とも恐
入候事夫はまたも早くと奉存候は奥御能にて無余儀御延引を申上候鹽
に申上に相成候事と奉存候奥御能之候は、乍恐秦公の表門迄攻入候を
不知位之儀と奉存候末世とは乍申十日之内にはトクテン如何可有之哉
日光山之御狩獵も眼前と奉存候

(以下三行朱書)

五日迄云々は 天上之悪きには無之哉と被察申候夫と申も本御嫌故
とは見ね申候

西公云々の事は承り及不申候得共御察之通如何と存候

右大公はいまた御承知不被爲在候哉如何と奉存候何も珍事前代未聞恐

懼恐惶謹言

(以下十一行朱書)

珍事前代未聞云々御同様恐入事に候乍然只今と相成候而者致方も無
之候兼々拙老愚考に 兩御所様御賢明に被爲渡候へは今と相成り何
にも不及申候得共追々御出生被遊候 長君を御初の爲ヤヨスカシ御
堀内通り邊へ林家風に無之實用神儒文武の學校御立御方々を初御旗
本下々迄も御法を立候て右にて御修行に相成候は、是亦前代未聞之
御方も可被爲出哉と兼々至願存居候事に候又在江戸大名の子弟杯も
出度者は願之上出候様にも相成候は、乍憚御盛代に可相成候貴兄御
了簡は如何左も無之捨作りにては何程種はよき芋大根にても風味無
之理合と存候乍然林家風の學にて御成長候は、なまじい御文才有之
今にも劣り可申哉にも存候林家佐藤等の不卓見之學問にてはなき方

宜敷と存候極秘論他へ洩候ては指支申候直に御火中

細はさすか手厚と申事にて一昨朝勢揃出來のよし長は存不申候立花同
斷阿は余程困り候由町人の不入屋敷は細越兩家と申風説に御坐候因州
屋敷固メか是も阿同様困り申候て町人如山立交り専ら調中と申事に御
坐候何も早々以上

因州云々是は貴兄御同席故御教示有之度事に御坐候何事も宜敷御教
示希候

御本文披閱玉取大名是迄聞も及はぬ事に候數十發は數百發と致候上
不足有て云々は互の事夫さへも恥辱と可申哉未一發も無之中云々笑
止千萬に候先年大坂一件の節松代へ出入候旗本甲冑所持無之故無心
申に付兼て懇意之者故極密一領遣候處もらひ候を隠しは不致却て同
役へ金を懸不申ケ様の品もらひ申候とて吹聴致候故我もくゝと出入
にも無之人迄道具屋へ來る如くよき具足有之由故もらひ度の借度の

と申來り松代も余り馬鹿々々しと申かし不申よし貰ひ候を恥辱とも
不存是迄なき事を人へ咄候如くの話にて三河侍の名はいつか拂地候
へはかゝる事になり候も理りに候

披閱大暑無御障令大悅候御返却書付落手尙又拜見之上朱書致し返上
申候御落手可被下候只今左之通御達有之

御三家

御城附へ

異國船萬一内海へ乗入非常之場合注進有之節は老中より八代洲河岸
火消役へ相達し同處にて平日之出火に不紛様早半鐘を打出し右を總
火消屋敷にて受繼同様早半鐘を打鳴可申候

右之通り火消役へ相達候間火消屋敷にて早半鐘打候は、諸向其御曲
輪中出火之節之通り相心得登城又は持場々々相固候様可被致候尤火
事具着用之積可被心得候且又右に付ては場末々々迄は早半鐘行届不
申候間萬石以上火之見櫓有之面々其節に限り早々半鐘打鳴し候様可

被致候

右之通相觸候間可存其趣候

六月

（以下七行朱書）
愚評曰所々にて早鐘打候は、騒々敷計にて婦人女子は譯なくなけき
さけひにけ惑ひ可申候弓鐵の沙汰無之候へは詰候ても火銃に敵對兼
何人居候而もにけ候外無之又勇猛の士は無術に打死候計と存候其上
此大暑に火事襲束候は、暑氣當り計多と存候扱々一々十迄相違した
るものに御坐候

六月八日

松越殿 參

水隱

一、此夕長岡侯より御留守居之者を召て御固メ御人數被指出引續きて御出
馬も止らせられん様に御心得あさるべき旨御達あり

一、六月九日此日も昨夕御出馬之儀も仰せ出されたるにつき御心得方御窺

等これあり殊の外御多端の御事共なり是等之儀は御記録に譲りて爰に略
之

福山侯トノ
往復也

一、此夕福山侯を去る七日被進たる御直書の御返報あり如左

過日者態々貴翰拜讀仕候打續大暑難凌御座候得とも倍御安靜賀上候陳
者今般異船渡來誠に不容易儀御同然實に晝夜不安寢食候右に付縷々御
心付之儀極密被仰下御尤に存候既に此程中右等之儀も愚考いたし七
日退出候後七時過ハ駒込へ罷越緩々得拜顔得と御同人御存慮をも伺小
生愚考をも種々御相談申上夜八時過龍之口へ歸宅仕候と留守中へ御細
翰參り居曉七半時過披見仕候處小生考と符合仕實大慶存候今般之義者
天下之御爲萬緒無伏藏御相談申居候事故乍憚御安心可被下候今般と近
海御固め被仰出御苦勞奉存候此上之最様により人數御差出出馬も被成
候義萬端御家臣末々迄能々被仰含卒爾之義無之様被仰付實用之備專要
と存候前文駒込之義能社御細翰被仰下厚辱存上候日々取込乱筆御免可

被下候早々不備

六月九日

二白時氣折角御保護專一と奉存候此程は三郎兵衛へ内々申上候義に付
縷々御挨拶御念入義と存候已上

一、今晚申刻過川越候を今九日朝九里濱におゐて異船を指出候書翰御受取
濟に相成候處夫々渡來の蒸氣船四艘共逐々内海へ乗入候に付其段備前守
殿へ御届有之趣爲御知あり夜に入大御番頭九鬼式部少輔殿一騎驅にて御
出ありて御逢の儀を願はるゝに付御對面遊はされしに目今異船の狀情事
已に急に迫りぬとて御心得方之義共御密談あつて無程御退出なり御人拂
なりし故其由を知る者なし

一、今夜亥の上刻過長岡候へ御留守居之者を被召呼異船内海へ乗入るにつ
き品川御殿山へ御警衛御人數被指出候様御書付を以御達ある故兼而御手
配之通り靈岸島の邸にて勢揃あつて十日曉寅の上刻御人數を被指出たり

一、六月十日此比の廟議にては使節の持參せる國書をたに御請取あらは異
船共の速に退帆に及ふべきとの事ある由漏れ聞きたるに昨日其事濟たる
後を却而追々に内海の方へ乗入此日暮近くなりての大炮を打放つ音遠雷
の如く總房の山々に響き渡りて夥敷聞えたれぬ都下の人心洶々として今
にも早半鐘を打出すかと心も空に周章狼狽し道行人の顔色は宗に變りて
見るも一陣笠火事具にて持運ふ物とては鐵炮着具を初戦闘の具ならさ
るはなし此夜半過て老若三奉行の衆中急登城あり各火事具にて軍器を持
せられたり十一日の明方近くなりて御退出ありしとぞ

一、六月十一日世の中いよ／＼騒かしければ何時御出馬となりなんも量り
難き有様なれば君夫人御立退の御手配りを夫々被仰付たり

松榮尼公も非常の場合に及ひなは君夫人謚姫の御方をも御同道にて御國
許へ入らせられたき御旨を老女共迄御沙汰あり

六月十二日世の中は昨日に同じ有様なから廟堂は寢鎮靜にも聞えたれぬ

猶御様子聞かせられんと福山候へ御直書を被進たり

炎暑之節愈御清安珍重之御義御座候然は渡來異國船一條去ル九日書翰御請取御返答之儀は來春カ長崎表へ罷越可相伺旨御諭告承諾早速可及退帆之處一兩日碇泊相願御開濟之由然る處却而本牧邊迄も乘人且神奈川沖にてハ小舟測量等も致候趣略致傳聞候御約定之義異變之姿にて此後も如何動靜可致哉殊に蒸氣大船等ハ迅速自在に出沒之由昨今之模様等如何御座候哉何分難量次第實に御大事と不安御案事申上候御憂勞之程致推察候如前書退帆之上來春等長崎表へ渡來迄は先靜寧にて出沒不仕御懸合に御坐候哉外に御異議も有之哉御内密致承知度候不依何時出馬も可致儀且ハ手前人數も不取敢差出置候得共尙又此比中國許へ申越候譯も有之旁御内定窃に相伺候此節不一方御配意御多務中甚申兼候得共御略答爲仰知被下候様希申候要文而已早々不宣

六月十二日

福山侯御即報如左

如仰炎熱難凌御座候愈御安靜賀上候陳者渡來異船一條ハ付續々被仰下候趣致承知候

書翰請取相成候上返答長崎表にて來年可相達候趣浦賀奉行ハ申諭候手筈に兼而申達有之處未浦賀奉行井戸石見守歸府無之に付承諾應接等之掛引委敷相分兼申候此方に而は假令此度長崎へ參候事に表向致承知候共必長崎へは來年參り申間敷矢張浦賀へ罷越可申哉と今日より覺悟可然存候事

書翰受取後是迄之掛場ハ却而内へ入夏島沖へ四艘共滯船右之内蒸氣二艘は右之邊致測量候由餘り輕蔑之所行切齒之事故直ニ打拂迄と覺悟も決候處彼方にてハ異心無之趣精々申立候ニ付書翰受取迄之手續共寬猛相違之事に相成候ニ付段々爲及應接彌承伏之上昨十一日浦賀沖へ四艘共退帆いたし多分今朝は浦賀沖を無故障歸帆致可申旨昨夜

浦賀奉行より申參候事

今日中には彌歸帆致候段浦賀方届出可申哉と存候昨日朝嚴敷爲及
應接候處能く事柄相分り承伏浦賀沖へ退帆明十二日朝彌出帆歸帆
致候段將官より請申出候事

此度出帆之上は何時又、可參哉は異船之情態難分候得共多分來年可
罷越哉と存候事

但當年萬一參候は、アメリカを聞付イキリス參り候はねは宜と存
候尤此儀は更に風聞も無之候得共其邊迄も致懸念居只今方彼是覺
悟罷在候事に候

此度之異船もはや歸帆可致と存候間何時御出馬被成候儀は先づ有之
間敷と存候事

是等の儀御近親別段の事故極密申上候間貴所様御心得ニ被成候様致度
存候取込要用のみ早々貴答申上候以上

即

尙々大暑折角御厭專要存上候當時之如く時々近海へ乗寄候ては何分
以後致懸念候 公邊は勿論諸家共非常之備嚴重に相整候様仕度相整候
上は異船參候共寛猛共 御所置は如何様共相成可申哉と存候乍不及彼
是苦慮罷在候事に御坐候以上

一、此ノ福山の老女花井か許より今日異船退帆せる由浦賀奉行方御届申上
たる旨を申上たり

一、此日薄暮に及び參州長澤村郷士松平主悦（忠輝公御血統）殿師質が小屋に來つて申達
せられしは今般異船の摸様により御出馬も被爲在旨を承り及びたり若さ
る御事柄も候は、御先手に加はり天晴勵軍忠度志願に候へは此儀 御館
におゐて御許容被下候半には其旨を以 幕府へも願ひ申上度候間 公の
御思召を窺ひ給り候へ御答へ承り罷歸度と勢ひ込て申さる故師質限に異
船は已に退帆せる由を申答へては英氣を挫くに似たりとおもひければ一

ト先ツ御引取候へ疾く伺ひ取りて御答はこれよりこそ申上へけれと挨拶して此人をは歸したり扱御聽に達したるに神妙之志の殆御満足思召候へとも異船及退帆たる上は夫等之儀にも及間敷との仰なる故其旨書札を以主税介殿へ申達したりき

將軍家不豫
ト付福山侯
トノ書通

一此比よりして 將軍家御不豫あらせられしか此月の廿二日に至りては世の中何となく騒かしく御大漸の聞えもあれと表立ては何も被仰出候事もなければ 公大に御憂慮ありて同廿三日福山侯へ被進御直書如左

嚴暑之節愈御清安珍重之義に御坐候然者近日存込候事共別紙に相認候間御獨閱被下度右申速度艸々已上

六月廿三日

密白

將軍様御不例尋常之御病氣と被爲替行末御案し申上候御様子相伺嘸々貴所様にも不容易御心配と遙察於小生ても乍恐御案し申上候別而先日

來世上も何か動搖いたし居候中に候へは萬一不諱之御義も可被爲在哉と深心配仕只、御快然奉祈念候外他事無御坐候右に付存寄候儀御坐候ニ付御近親御懇意に任せ犯萬死有体に申上候右は今般之御病氣御大漸に被爲及間敷も難計平世とも違ひ外寇之取沙汰も強く追々傳承之趣にては覬覦之夷情も深重に被察候への方今之廷議乍恐 皇國之榮辱盛衰に相拘り可申御義にて一大事至極之御時節に當り右様の御大變有之候而は舉世當惑無此上何となく洵然可相成哉ニ致暗察候勿論 西城公被爲在候へは一統安心仕居候儀との乍申御初政之艱難實以奉恐察候右ニ付當時天下之屬目英明老練一に駒邸老君に止り候事に候へは此時にあたり此人をして 西城公之御羽翼に被充候は、んやむ事なく列候は不及申士民所嚮を得猶更安堵可致は必定と奉存候右は忌諱に亘り候事共は恐惶不少候得共々様に無御坐候ては實以難相叶御時勢と存込候故天下之御爲難默止及建白候事に御坐候借踰不敬之義者幾重にも御寛察御容

恕被下度候死罪頓首

六月廿三日

尙、本文之趣は嘗天下の御爲のみならず貴所様之御爲に謀候而もかくあるへき御義と奉存候吳々不容易御時世難安寝食候已上

福山侯御即報如左

貴翰拜讀仕候日、炎熱難凌御坐候倍御清安賀上候陳は極密に被仰下御別紙委細御返事も可申上處甚取込居何分認取兼略御請申上候

被仰下候趣至極尤之義にて小生も過日中より愚考仕居候事共も有之誠に符合大悦之至奉存候乍不及彼是心配夫々能々申談取計事も可有之哉と存候今に不初義御深切之儀且爲天下實ニ感悦仕候

右御請迄如此御座候艸々謹言

即時

尙、時氣御自愛專要に奉存候御端書之趣厚忝存候當節は内外之心痛不

幕府諸侯ノ
意見ヲ垂問ス

容易御時節日夜苦心罷在候乍去押張相勤候間乍憚御安心可被成下候乱筆御免奉希候以上

一、七月朔日此比水戸の峯壽院尼公御遠逝によつて停止中なりしかと昨日の御觸達に依て今日御登城ありしに御謁後於黒鷲御杉戸前閣老衆御列坐にて此度亞米利迦國々指上たる書翰の和解二冊御渡あつて書面之通商御許容の可否は國家の御一大事に候間書翰の趣意御熟覽之上利害得失後來之處迄も御思慮を被加忌諱に觸れ候義たりとも御銘々御心底を殘されず御見込之趣御十分に被仰達候様御書付を以被仰渡たり

(以下六行朱書)

今度浦賀表へ渡來の亞米利迦船々差出候書翰之和解寫二冊相達候通商之儀者是迄之御仕來も有之御許容之可否は不容易事に而實に國家の一大事候間右書翰之趣意得と遂熟覽一体之利害得失後來之所迄も厚く思慮を被盡假令忌諱に觸候事に而も不苦候間銘々心底を不殘見込之趣十分ニ可被申聞候事此度亞米利迦船持參之書翰於浦賀表請取候義は全く

昨夢紀事一 (嘉永六年七月)

一時之權道に有之候間右に不拘存寄之趣可被申聞候事
一、右被仰出につきては兼而思召被爲寄御見込も被爲在候へとも不容易御
大事之義あれ御國許御家老共初の意見の如何あるへきは是等の次第も聽
し召され候上にて幕府への御答の被仰上度と爲御垂問同月四日飛脚を
以右之趣御國表へ被仰遣たりき

水老公隔日
登城

一、七月四日水戸前中納言殿御義海岸防禦之義に付此節御用も有之候間以
來朝之内隔日程にも御登城可被成御隠居後の事候へは御表通りは不及平
川口を御登城御風呂屋口より御兩卿御扣所へ御通り可被成旨被仰出たり
一、七月五日水老公へ此度之御悔且御見廻として御直書を被進たりしに今
日左之通り御返書あり

御尋御悔兩度の貴書其時々披閱毎々御懇之義忝奉存候晝夜御看病申上
拙老御同年之事故今一度は是非く御引戻可申と張込申候處天命無已
残念至極仕候夫と付而も異船手當向害に相成りこまり入申候扱又去ル

三日には忌御免被仰付登城候義被仰出驚入申候則今日登城仕候處於
御座之間右大將君へ御目見へ被仰付其後閑老一同異船之義に付對談
有之身に餘り難有事には候へとも御承知之通り不才何一ツ御爲めに可
相成良考も無之吳々も恐入候事御坐候何ろ御良策も有之候は、御申聞
にいたし度候先ツは過日之貴答今日登城之御吹聴も申進度旁早々申進
候也

七月五日

越前守殿

御報

水隠士

宇和島侯ノ
密使參上

一、七月廿一日宇和島侯の目代軍使兼須藤段右衛門といへる者參上せり師
賀出會て口上を承るに此度異船渡來之義を候御在所に而御承知あり廿六
日兎角不容易事に聞ゆれば兼而御同志にて被仰合御事も候へは此御方へ
參りて此地の事情をも伺ひ來るへき旨被仰付て去月廿五日宇和島表を出
立して一昨夜到着せる由にて御直書一封指出したり左に記す

昨夢紀事一（嘉永六年七月）

五十九

先比播大藏谷の呈拙牘候處非常御多忙中委細御返事被投不相變御懇篤之御義深く忝盥讀候今程炎暑如熾候處愈御勝廻奉大賀候然も兼而御互に懸念之亞米利迦洲之異船來浦賀傍若無人輕蔑併吞之舉動切齒張目無上又内地の御不備を考候へは悲歎痛憂無已當今如何とも致様無御坐候忠臣有志いぬ死之秋と奉存候既に春秋城下之誓の御恥辱歎と奉存候へは殘念難堪あくまで内地武備之御不備見拔候故夷奴もあの通可惡致方隨意はたらし候儀と奉存候前後考量仕候而は 明公之御胸裡如何計と奉遙察筆端には難申上萬里隔絶仕居候而も 公之御胸中は奉恐察候間僕か方寸中も御洞察可被下と奉存候虜情も御細翰にて能相分實に御多擾御心配御投與不啻奉感佩候芝邊御固メ被仰出候旨御本懐と奉存候其外細川始は寢耳に水如何計かと存候其後如何相成候哉實に不容易事態に相至甚恐入存居候追々御靜に相成候は、此度顛末承知仕度候且水老公神策も不被用儀と歎息仕候長崎へ畏りすこすこと廻候は、領海洋

面通航仕候故專相備居申候其地は留守中故甚孤弱之少人候得共兼々申付置候間人數差出度申出候趣申越防禦被仰付候得、本懷難有奉存候先御投書御禮一寸申上度尙其後御様子伺度亂略早々頓首

六月廿三日

二仲毒暑中別而此時令御自重專一奉存候先以 明公御在府故 幕朝の御幸甚と奉存候僕杯も大に降心仕候碌々瓦全仕居候條御擲念乍憚奉希候不備

越州賢明公閣下

宗城百拜

毒熱之候候處愈御清勝奉大賀候扱異虜之一條其後如何候哉扱々心痛憂憤罷在申候何分安心も難仕候間當節都下之光景爲見聞僕か臥内之臣須藤段右衛門目付役軍使兼帶出府急々申付候に付 閣下へ參上伺御安否候様申合候何分僕と被思召不苦候は、一寸御目見被仰付口上御聞被下度加之事實之儀委曲御教示被成下度伏而奉希候一寸此段申上度草略艸

々頓首

六月廿五日曉六時

伊 遠江守

宗城

越州明公侍史中

二仲時下御自玉專一に奉存候當今如何と晝夜心痛仕居中候況其地に而は尙更之儀と奉遠察候何も段右衛門へ申含候儀に御坐候吳々不苦候は、御逢被成下度左候は、千里罷出候甲斐有之御禮難盡申上奉存候已上右之通の書面にはありしかと此地の事情は一昨日御細翰を以無殘處委細に被仰越たれば段右衛門御前へは不被召出此由申聞せて翌廿二日 御出殿之節御目見被仰付て候の御安否御尋將遠路被指出たる御厚意且段右衛門之勤勞等之儀を御挨拶あらせられき

一公情將來を御照鑑あるに 將軍家の御大喪も此比に至つて漸く御發表之聞えあれは是迄密々には叫き合たる事にはあれと世の中も今更燈の消

えたる様にて時は今開闢以來聞も及はぬ外國の使節渡來して不容易筋の國書を捧けたる折かれは此後の世態は如何成行へき歎と人心も穩かならざるにかゝる御大喪とさへあれは實に危殆に迫りたる秋なるに 右大將家御壯年にはあらせられなから曾而御病身の御聞え有之のみか 幕府には此御一方と 長吉君との外に絶て御方々も坐しませす加之 長吉君御幼弱なるか上に御病氣にも坐せは頼み奉るへくもあらず田安には中納言殿一橋にも刑部卿殿計三親藩之内にても尾張殿は御末家より御相續の御方なり紀伊殿は未だ御幼齡に被爲渡唯水戸の御家而已御繁昌にて其他は 幕府を始奉り 東照宮の神胤も將に絶んとするか如くなるを深く御歎き思召かゝる非常の時となりては猶更に 幕府の御基礎固からずしては人心愈疑懼を懷き何事に付ても御爲宜しからぬ事も出来ぬへければあはれ 新將軍家の御一臂の御相談御相手にもならせらるへき 御養君もかなと思召めぐらすに止事なき御あたりも前に記せる如くしかるへき御

方々も坐しまさず紀伊殿は 前將軍家の近き御甥に渡らせ給へと御齡十
 歳にも満たせられず田安殿尾張殿水戸殿等いつれにも御年の程ふさはし
 からず就中唯一橋刑部卿殿は御年比にもならせられ且世出之御英明に
 被爲渡候御事は 公にも兼て御親炙あつて知らせ給ふ御事なれば當時の
 御血統は御近くも在らせられねと正敷 神胤に渡らせ給ふ御事は紛るへ
 くもあらねは此御方をたに 御養君になし奉らは天下憂るに足らすと思
 召興させ給ひて七月二日總出仕の御觸達によつて御登城有りしに 將軍
 家薨御の旨御發表なり此日於 營中兼而御同志なる薩州侯へ右件の事を
 窃に仰せ試られしに侯も同じ御事に思召さるゝ由にて此御事は後日必紛
 然の論も起るへければ唯今水戸老公杯々仰立られん事可然御事にはあれ
 と一橋殿の御事なれば嫌疑なきにしもあらねは公と我との主張ならては
 適ふましければ御心力を戮せられて御周旋を盡さるへしとの御内談を決
 せらし御事なりしとそ

一橋卿ヲ儲
 君トセシメ
 トナシ薩侯ト
 議ス

墨國圖書ノ
 儀ニツキ答
 書

一、七月廿九日亞米利迦國書翰之儀に付御國許へ御垂問ありし御請惣名代
 として御家老本多修理に鈴木主税差添て此日到着せり仍之 公兼て思召
 込れたる御旨に御國許の趣を御斟酌あつて修理初へも反覆御商議の上御
 答書御出來にて八月七日山縣三郎兵衛を以海防掛御老中牧野備前守殿へ
 被指出たり如左

御答書

今度浦賀表へ渡來之亞米利迦船を指出候書翰之和解二冊御渡通商御許
 容之可否一体之利害得失後來之處迄厚致思慮見込之趣十分に申上候様
 御達に付存寄之趣左に申述候
 伯理璽天德書翰之趣にては二百餘年の嚴制を犯し數ヶ條之難儀相願就
 中彼理呈書中には使命を遂んか爲に兵威を挟み或は御國法を無智之政
 躰と稱する類實に 本邦を蔑視するの甚敷言語同斷之至にて不堪憤激
 全船粉碎して 神國の御武威を万國に不被輝候半而も難相成秋と奉存

候得共退而方今之時態を致熟慮候得者左様にも御取計難被成も無御據次第にて誠に以開關已來未曾有之御困厄にて御大事無此上義と奉存候乍併彼か情願之儘御許容御座候而は神武之屈辱は不及申風聲を逐て萬國舉而及出願候は、本邦有限之財物を以萬夷無盡之嗜欲に交易致候時は衰弊日を刻して俟へく若又三五年の程限を被立彼か情願に任せ暫く英氣を避け被置防禦全備を待ち御斷りに相成り其屈を伸へ候半と申も亦一時の權道にて當今適宜の御處置にも可有御座候得共當夏渡來之儀者既に昨年より端々巷説も有之事に候處別段御嚴備之御待受も無之臨時書翰御受取に相成候事故一時之御權道とは乍申有志之徒は甚以殘念至極に存居候處再御權道と被稱和親御約定等に相成候は、全く兵威に恐れ彼か術中に落入候姿に候得は奮勵之士氣も摧折に及び御年限濟に至り俄に作新可致儀は一向無覺束次第と奉存候萬一願之通御許容相成候ハ、欣然歸帆可致哉之御見込に御坐候共彼は既に内海之測量も

相整ひ浦賀海口を初一も恐るへき備かきを致觀察候事に候得者自然貪心相開け再渡之節は御返答をも不相待如何躰之振廻可致も測り難く若又一段御許容御座候とも追々防禦之御用意有之を察して其備の完からざる内に兵端を起さん事を相謀り英夷の中山に於る如く猖獗を恣にし御府内を横行し又は商館を開ん事を強願致候杯傍若無人之難題を申出候は、假令公邊にては御寛宥之御沙汰に相成有之事に候共萬國に卓越せる和魂は固有之御國風候得は容忍に堪兼候處より事の敗れに相成り衅端隨ふて相開け候半も亦必然の勢に有之且萬國共に御年限にて御指免に相成候而者則萬國の下に屈候と申ものに而汚辱は不及申御斷に相成候節は數多之大敵一時に來寇之運ひに相成愈以防戰御難儀と奉存候右様御屈辱を御忍ひ被成候御武德之衰弱を見透候時は異國は扱置全國之大小名迄も如何見取可申哉に而御國地の御政道も是迄之御振合立行兼足利氏之末世同様にも可有御坐歟と致恐怖候左候得も何れの道

にても御許容無御坐候方御長策に可有御坐と奉存候乍併御許容無之時は必兵端に可相成は勿論に御坐候得はたとひ大軍艦幾十艘渡來候共御一戰之御覺悟を不被相極候半而は御斷りは難被成儀と奉存候右に付而は墨夷願之趣御取揚無之御斷に相成候間明春渡來之節は必戰之心得に而其用意可致旨列國之諸侯大夫士へ被仰付専ら防戰之術を御勉勵有之天下向ふ所の心志を御治定御座候而先ッ大元帥を被建兵馬之權柄を御委任御坐候義最第一之御急務に可有御坐と奉存候次に戰地を御定無之候半而も御廟算も可難相立候依之相考候處戰地は全く御府内に可有御座と奉存候右は近年來浦賀邊海口におゐて追々炮臺御取建之趣には候得共砲は大船一艘之數にも足り不申剩小彈之物多く炮臺も實用に適候者少く又戰艦之御備も無之哉にも承及候得ハ四家之人數如何程嚴重に海陸を相固め候ても曾而戰鬪の用には相成申間敷候得者堅牢之異舶海口におゐて遮止候儀は萬々無覺束儀と奉存候且たとひ如何程之大礮に

ても彈之至は僅に十四五丁計に而海口之中心迄は難相達由候得は海に之儀は軍艦御備に相成候より外防禦之良策は有之間敷と奉存候得共當時彼に對すへき軍艦も無之海口之捍禦如何にも術計無之候得は是非御府内へ募地に乘附可申夫に付而者御府内を以其儘戰地に被相定候より外ハ無之候然る處當今之如く第宅民屋櫛比致居候而は彼方ハ火攻之策を行候節避遁之餘地無之海岸之防禦決而難行屆譯に候得は先つ沿海之第宅民屋海岸より五丁計之處不殘御取拂に相成要地を始として聯綿炮臺を築き大礮數千門を鑄て是に備へ彈藥を具備し軍艦を造りて進撃の用に充て戸籍を改て遊手素餐之徒を生國に歸し戸口を積りて軍糧を積み蓄へ必戰策定るの勢を天下の將卒に示し又諸侯をして各國に就かしめ帝京を護衛し皇國を守らんか爲に各國海岸之備を嚴にし外寇の邊海を侵すを防ぎ江府の戰鬪防禦之儀は八万騎之御旗勢下脱字に領分海岸無之諸侯を御人數に加へられ御備配有之猶不足も有之候は、就國諸侯之内

御人撰を以加勢被仰付大元帥是を統領指揮し勉勵練業せしめ又内には大儉を修め給ひ乍恐 御一身之御衣食住は雨露飢寒を被爲凌候迄にて冗費を御減殺有之後宮之奢侈を禁し婦人之數を被減土木の構營は 禁闕之外は假令日光山之 御宮たりとも海防御全備無之内は御修覆も御見合に相成り是に准し一切之治務は悉皆御擲却にて愈以防戰一途之御處置に天下之財力を傾け夜を日に繼て御修治有之候は、來年春季迄には凡二百餘日之日數有之候へは大方成就不致儀は有之間敷左候へは將士死守之志を固ふし俟ことあるの英氣振興可致儀に而異船渡來候共當年之形勢に事變り整々之旗堂々之陣沈深靜定犯し難き眞實之御嚴備を以御待受被遊扱御返答之儀は漂民御撫恤之外は願之趣御取揚難被成段非を咎めて夷情を激せず威を憚りて我を屈せず義理分明公正穩當にして嚴然たる御取扱に相成候は、漸く蔑視之夷情を挫き暗に朵頤之念を絶候は、 神州之英武往昔に復し萬古獨立之 帝國地球上に冠絶する

の御美名も初て全かるへき義と奉存候然るを年久敷致染習候太平の除澤に溺れ因循に安んじ和戰の兩議定決せず在苜日を送候内異舶渡來に及び摸稜苟安之策行はれ候時は彼愈其備なきを熟察し火丸都下を焚き霰彈將卒を斃すに至り候は、土崩瓦解殆不可支死屍如山號泣道路に盈候儀者眼前にて擾亂之極と奉存候此時に方り先般の如く諸侯へ警衛を被命候而も防禦之全策御開示も無之事故各一手限之働きと相成全勝之儀は勿論如何程多人數を國許より招呼候而も忠勇之士空敷亂炮之下に憤死可致は必然之勢にて可惜可憐者不及申果して天下衰弱之基と相成遂には講和之策行はれ夷虜之屬國奴隸と可相成歟と憤歎慷慨無止時實に寢食も難安 皇國之安危存亡此秋に限候儀と存詰候へは唯々講和之妄議者一切御禁遏御坐候而今日只今より必戰之御廟算御畫定之儀急度被仰出元帥を被建候儀急務中之大急務と奉存候一日を空敷致候へは一日之防禦相後れ候事に候得は何卒非常之御英斷を以て立地に御決評御坐

候様乍憚專祈伏而冀 公邊におかせられ候ても夷虜の侮りを禦かせられ
天祖の皇統御動轉かく萬々世に傳へられ天下を泰山の安きに措かせら
れ候儀こそ征夷大將軍當今之御先務にて 御祖宗へ之御追孝も亦此上
之御義は有御坐間敷と奉存候海防之儀に付今日之治務に亘り障御坐
候杯は前書の御大事に御比較御考定御座候へ、實に單髮輕塵之儀と奉
存候右は不肖淺陋をも不顧躡等不敬之失言も不少候得共御一大事之譯
を以御垂問之折柄不忍黙止不殘心底十分に申上候事に御坐候猶委細之
儀は別紙に相認候得共何分にも必戰と元帥之二條においては早急御評
議之程伏而所仰希に御座候以上

八月

御名

本紙不盡之處も御座候得共其邊迄も認取候得と不文愈以冗長煩雜に
相成候に付猶又本文之餘意を左に致陳述候

江戸を以戰地に被定候様と申儀は御府内は第一彼か火攻を施さんと欲

するの地動さんと欲するの根據に候得は其火攻の謀を伐ち其動さんと
欲するの根據を固定すへきの先務にて海防におゐて缺へからざるの一
大事と奉存候事に御座候其子細は海口之防禦手段無之候得者是非内海
へ乗入可申候其節如何程御固人數被仰付海岸へ無透間並列致候而も異
船より火丸を所々へ飛し風に乗して致火攻候は、都下之億兆一時に及
騷動蹂躪雜踏無此上義と可相成候左様相成候節は防禦之人數逆も火烟
に咽ひ多勢に被阻中々防戰處にも有之間敷候仍之海岸筋急度御嚴備相
成候に付而は人家入交り之地にては防戰は難相適事に候得者海岸を五
丁計之處大名屋敷町家共悉く御取拂に相成假令夫々以内の人家致焚燒
候而も海岸防禦之場所迄は波及不致様相成有之候得は心靜に防守無手
拔行届可申儀と奉存候尤大數之人家御取拂と申も不容易事に候得共當
然之難儀を憚り此儘に被指置候而は防禦之術も難施防禦不全候得は都
下全を得かたく江戸一敗に就候は、天下之耳目も一變致し 本邦も保

全し難き勢にも可相成候是等之利害御商量御坐候は、是式之儀は九牛にして一毛を損候同然に可有御坐候右御取拂に相成候人衆之儀江府産に無之者は悉く本國へ罷歸り又此表出生に而有力之徒は他所へ致轉居候段相願候は、代地被下置又夫等之手廻も出來兼候徒は親類へ御預被成親類無之者は富商大賈へ御預け猶夫に洩候向は御救小屋被相建御賄に相成候半而は難相濟儀と奉存候勿論當分は種々相歎き可申候得共不時之火攻に逢ひ候に競らへ候は、如何計の迷惑にも無之御勇斷を以御取行ひに相成候において決而御指支之義は無之候且眼前の悲歎を御憐愍にて姑息に御指置被成候而も不遠して焼爛粉壺は必定之事に候得は唯今平穩之内に轉遷被仰付候儀は難有御仁政と奉存候且又後來を思量致見候而も萬國の勢ひ強を凌ぎ弱きを服し通商も次第に相開け行候趣に候得は此末逆も御國地に來舶出願等之儀有之間敷とも難申候得は旁以今般之機會に後年之儀迄も萬安之遠圖を御施置被成候儀是非當時之

御長策にも可有御坐と奉存候其内三縁山之儀者甚氣遣ハ敷御場所柄候得共容易に御遷轉可被成様も無之候得は近傍海岸之守衛を嚴にし且火防之御手當被成置候而可然御儀と奉存候

一元帥を被建候て軍國兵馬之權柄ハ不及申當時ニおいてハ今日刑賞之御政務筋迄一切御委任可被成御英斷御決定之上ならてハ名實全からす威令難被行候得は必勝之策も相立申間敷と奉存候畢竟治平之時にハ海防も政治之一端に相成有之候得共國家之存亡に關係致候秋ニ相成候而ハ至重之大事と相成候當時殆亂世にも可相成際候得は君臣共に力を軍務に竭し心を籌策ニ委ね可申時節候得は御宗室之内御德望御兼備之御仁躰を元帥に被建御軍事御政務一切御委任ニ而唯々

神洲之御武德地に落不申様千慮萬考精力を盡候より外ニ政治も事務も無之事候得は此御一舉何より以大急務と奉存候其子細ハ天下を治候義政事の大源たるハ勿論之處當時之天下は軍政ならてハ可相治見詰無之

候得、其軍略を御掌握御統轄可被成大元帥を被立必戰之機を天下に御示し士氣奮然致興起候得は必虜謀にも陥り不申天下も治り可申候元帥無之時、當時之躰にて可有之當時之體ニ而因循時日を費候得は風俗政治共に陵夷頽敗に就キ一度外寇之侵掠に逢候得、一敗塗地の眼前ニ而遂に天下之傾覆ニ可及程之儀と奉存候得は前條之通元帥を被建候上に猶日本國中有志之建白を御求被成候、定而神機妙算も可有之如此衆知を合せて防禦之全策を被建候、天下之勇銳、日比に百倍すへきは勿論之義と奉存候且又和蘭之儀は萬國之事情にも通達仕居候事候得は今般墨夷之書翰指出候一件ニ付取捨成敗共に一應和蘭之意見御垂問御座候義御有益ニも可相成數年風說書も指上且交易ニ付而二百年來御國制を謹守致居候事候得、御義理におゐても御尋御坐候方可然御義と奉存候御返答之儀も御都合出來候義候、蘭船へ御托し墨船出帆已前彼地へ相達候様被指越候、御義理合も御届被成可然御儀と奉存候尤

其節、御返翰守護之爲彼理も見知居候浦賀奉行之内一人被指添候も可然哉且又御返答之内漂民御撫恤之一條御許容御坐候而者彼方に蠶食之遠謀も有之候は、夫ニ付種々之妨害を生し漂民に事寄せ年々歳々沿海所々へ致來泊候様之儀有之間敷とも難申候得共此儀は内地之御備さへ堅固候得者事に臨候而之取計方は如何様にも致方可有之候何分呈書中にも本國之民亦是五倫之内杯と事情専ら倫理を正し人類憂憫之筋を以願出候處夫をさへ御斷りに相成候而は仁義之御國風共難申且天保之度御憐恤之御觸達も御食言に相成信を萬國ニ被失候而は是亦御國躰に拘不脱力り容易御儀と奉存候得共成丈々後患に不相成様之御懸合ニ御許容可有御座儀と奉存候事ニ御座候

一、防禦之儀は廣大多端中、以短才之拙者式不能議論候得共存付候概略を申試候前文町家等御取拂の上海岸之要地を撰み炮臺を築き可申儀と奉存候築方之儀は江川太郎左衛門并松代之藩士佐久間修理等へ被仰付

可然と奉存候要地之分致成就墨船もいまた渡來不致候は、追々堤防を築き海岸へ周匝し大炮之儀は處々炮臺は勿論其餘之堤上共に何等之儀種を如何程被相備候哉御詮議之上五千にても一萬にても早々御鑄造可被仰付右々付銅材不足之儀も有之候は、都下一圓無用之銅器は不及申燭臺火鉢之類たとひ日用缺へからざる物たりとも木石に代へて用を辨すへき器械は銅類之分悉く御引揚にて時日を刻し御製造相成炮架礮車右々准し御製造有之彈藥器械十分に御取揃之上處々之炮臺を夫々之御人數へ御割賦有之守衛被仰付尙有餘之人數は陸戰ニ被備日夜操練可有之は勿論ニ候尤古風之軍制を改革し不用の雜兵を省き成丈ケ夫食之費を減し精練之逞兵而已御撰用可有之は不及申事ニ候乍併火藥之儀は御府内有合計ニ而は不足可致候得者何とか急速取集之御趣法無御坐候而ハ不相適儀と奉存候大方幾千萬斤之御入用と積和蘭へ御注文ニ而外國より急々御取入ニ相成候而も可然哉ニ奉存候尤當時諸大名此地之御備

に致所持居候大炮彈藥共御買揚に相成候は、是又少々之御間ニ合可申且又軍艦無之而者覽者之城を守る如く進撃突戰之術難施候得者是非御製造不相成候而者難相適事候得は是亦早々御取懸りに不相成候半而者御手後れニ可相成候乍併新製之儀容易ニ出來申間敷候得は大小五十艘計り火藥同様和蘭へ御注文ニ而急速御買入ニ相成候も可然歟尤舟計有之候而も兵士習熟不致候而は其用をなし難く候得は今日ハ初而海軍に可被命分は海船に乘習ひ波濤を凌ぎ逆風を乗切候而も平坦席上に坐するか如くならしむへき議と奉存候此の外防禦に付而者百般之術計可有之儀候得は夫々堪能之仁に御委任有之天下之御威勢を以誠精御取急き被成候は、如何程の大事たりとも恐らく成就不仕義は有御坐間敷と奉存候得者何分頭燃を拂ふ御勢ひニ無御坐候半而者不日之成功は無覺束儀と奉存候

一、於御府内御必戰之策を被建候ニ付而者日本全國武備完整に相成別而

沿海之諸國は嚴備に不相成候半而者 神州之御國威相振ひ不申事ニ存候仍之先第一ニ 皇都守衛之元帥に尾紀之兩華胄を被相建近傍之諸侯を御附屬有之且領國に海岸有之諸侯は歸國被仰付軍艦製造も御指免し何分自國之海防無油斷可被仰付義第一之急務と奉存候左候へ者一には都下之夫食を減し二ニは諸侯の疲弊を補ひ三には事に臨んで日本入之騒き可相成妨害を防き可申儀と奉存候都而必戰之時に當り可被召集諸侯を却而歸國被仰付候儀者表裏之儀候得共此時に當り諸侯と共に皇國を御守護被爲成候大公之御雄略を天下に御示し可被成御儀と奉存候當時之躰ニ而は日本半國之諸侯在府之姿候得者領國留守之家來共都下必戰と承候得者誰壹人主人之身上を懸念不仕者は無之候得者各先途を見届候半と不招呼候而も先を争ひ可致出府は必然ニて左候時は全國之騒動に相成都下之人數も多きに過ぎ騒擾を倍し軍糧を費し諸侯之入費も夥敷儀に可相成且國々は總て空虚に可相成候加之此表逆も多人數

御手厚成姿計にて先般之如く一手々之出勢にて御廟策も不致承知人心渙發防禦之具も無之勇士選卒一途に死を争ひ候計之兵勢ニ而所謂以卒與敵格言の如く亂炮如雨死傷山をなし候より外は無之正に是日本半國忠勇之士を一集して夷虜之手を假而致殺戮候も同然ニ而如何にも難忍御事共にて萬に一得も無之候畢竟都下之御警衛には數萬の御旗本勢有之事候得は節制致完備候は、御府内海岸之守衛におゐては御不足之儀者有之間敷候得は尙又御譜代衆の内領分海岸無之諸侯を被召加其上にも國持衆之内兩三輩御指加へ被成領國之守衛は隣國隣領へ後援被仰付候は、所領危殆之顧念も無之十分之御嚴備に可相成儀と奉存候尤諸侯之義は兼而操練致置候人數に應し夫々之御場所御割賦有之御場所附之器械は大炮を初惣而御渡ニ相成候様取計候半而者國許と此表と兩途之備向の難相整儀と奉存候又府内御備向之義は御廓通りも同様之儀ニ而 公邊におゐて御完整可被成は當然之御儀と奉存候加之御加勢人數

之儀は軍糧も 公邊を御取賄に不相成候半而者平世と違ひ多分之人數指置候事故是亦兩途之失費に相成候而者國內疲弊に及び可申儀と奉存候且又在國之諸侯留守屋敷之儀は如何程小勢を而も逞兵指置候様被仰付置候得者事に臨み一廉之御用便を可相成儀と奉存候

建白ノ儀ニ
ツキ福山侯
ヘ示談

一、右御建白の事に付ても御對面之上仰せ入られたき御事とも、坐せしかは御直書を以御懸合の上八月十日の夜福山侯の大奥へ御入ありて御廟算之御次第をも御談論遊されしに明年渡來之上は必戰之御仕構へにて御手強き御會釋にも可相成との御廟議にて軍艦も二十餘艘和蘭へ御注文に相成内海へも炮臺御取建有之外國之事情は長崎在留の和蘭甲必丹へ御尋に相成品をより江戸表へも可被召寄との御評議のよし諸侯の建白も廟堂の氣息を測候哉いまた半に過て指出さゝるとの御内話なりしとそ此御對話の御折柄密に前條に記する 御養君の御事を御申試みあらせられしに候おのれもさこそ思ひよりて候へと此は上なき重事候得は輕く敷申出へき

事に候はねはおのれ心に秘め置て好き折を見てもものし侍るへければ努々人にな語らひ洩し給ひそと堅く申と、めさせ給ひしとそ師實も後に承りぬ一、八月十一日昨夜福山侯へ御入ありし折の御物語の次第と申水老公は如何に思召坐すらん將 公の御建白も御覽ありしや如何にと被仰進たりしに老公の御返書如左

兩度貴書令披閱候如諭新涼相催候處益御勇猛何寄之事を存候扱て御建白云々數拜見被仰付候へとも未貴書は 上覽に相成居候哉若又御役々熟覽致居候哉未た拜見不仕候何れ其中には拜見被仰付候事と存候如何様御明論候哉早く拜見仕度事を存候和を唱へ候人と戰を唱へ候人と區別にて指支申候得共拙老は内戰に外和に致し候方と存候内さへ戰に覺悟いたし置候へは外は和を以なやし夫にて先を兵端を開候とも差支は無之若承知にて歸帆候得は尙々之事と存候何れにも處々より雨の如く封書出晝夜見候得共中々兩眼引足り不申候乍略儀兩度之御答一度を申

進候御海恕可給候也

八月十一日夜即刻

二白おろしやいきりすふらんすあめりかを敵に取り申候御時節實ニ天下の安危此時と恐入申候廿年前を追々申上候通りニ相成候へは々様之事は有之間敷萬々一有之候而も格別に被成候方もよろしく候處今大病人受取候様にてヒを投候外無之候貴兄にて拙老之代り御勤被下度拙老今になり何良策も無之日夜心配計ニ而御免願候より外良策は有之間敷と實に恐入申候 御引移りも近々と奉存候へ其上に而は何卒御免に仕度事ニ候已上

公御返翰の趣ニ付内戦外和の御深意も被爲聽度と同十五日左之通被仰進たりしに例之御朱書の御返報あり如左

涼氣次第相催候處先以愈御清寧奉恐悅候然は先日差出候建白御一覽被成下候哉相伺度且又先日尊書中に内戦外和と被仰下候儀は今般天下へ

必戦之御覺悟被 命來年蠻船渡來之節は可成丈け温和に 御國威御諭告を外和と申儀に而從 公邊御打拂にては無之彼方々不法起候節は御決戦の御見込ニ候哉又内は前文之通外夷へは交易計にも無之願通り和親候御許免右を外和との思召候哉二ヶ條尙又相伺度奉存候日夜乍恐苦心御案思申上候餘又々御多務中呈上野贖仕候右申上度如此^{御脱カ}坐候誠恐誠惶頓首謹言

八月十五日朝認

尙々涼氣別而爲 皇國御自護奉懇禱候謹白

(以下二行朱書)

如諭涼氣相催候處益御勇健降心いたし候内戦外和之儀ニ付縷々被仰越候趣謹承いたし候拙者見込は相成丈け内之御備手厚にいたし扱異船來候へ者可相成丈け此方々は争端を不開平穩に取計七夷人承知無之彼より争端を開き候は、無二念打拂ひ闔國の力を盡し 御國威立候様致候より外無之と存候乍然 尊慮は如何可有之哉何にもいたせ

貴兄ノ御身にては銃炮玉藥等も御手厚く御國許を御取寄セ調練等時
御勵セ被置成候方と存候未大名へ御懸ケの分も出切不申候所是も
追々に出揃候半又 御代替 御引移等も其中には可被爲在候へ者
何とか被仰出も可有之と奉恐察候處何れの脱カ道武家にて武を被勵銃炮玉
藥の御手當は十二分にも十三分にも御手當被成候義御損には相成間
敷と存候願筋御濟せの儀於拙老は御宜とは不奉存一旦御濟セ相成
候へ者決而御止は六ヶ敷追々日本勞症病の如く相成候へ者今よりも
尙以六ヶ敷可相成と存候何レ其中には何とか御達も有之事と存候へ
者先々黙々にて御手前の武備御勵何寄之事と存候尾薩杯は正論にて
安心致候得共又願を濟セ安樂に致たがり候者も多一致不致にはさて
さて心配いたし候拙老見込之處も先々御他言無之様御懇意に任セ此
段申進候○御指出に相成候御下書披閱乍毎度感心いたし候假令臺場
大炮出來候とても耻をわすれ候得者臺場も筒も彼か物に可相成志が

何よりの處と存候極密御答迄早々如何にも寸暇無之略答は御海怒可
被下候

即刻

御墨書御別紙

追而申候定而 公邊より拜見可被仰付候得共先ッ拙老の論と同じく候
へ者萬々一拜見不被仰付候節の爲寫し置申度候間此段御斷申候寫し終
候は、早々返上可致候大名中第一の御論と拙老は存候
公和戰の御策は御同意之筋にて御安心あらせられしかと十一日の御追書
に被仰越たる御引退の御意衷被爲在候を深く御懸念思召天下の棟梁とも
御頼思召老公のかゝる思召立にては此末如何成行んと御憂慮之餘り此御
事に付ても御廟議之次第御案勞思召旨にて同十六日福山侯へ御直書を被
進たりしに同十七日候御返報左之如し

昨日被遣候御細簡謹而拜讀仕候如仰新冷相成候處先以愈御安靜欣喜之

至存候陳は先日は御來駕御坐候處御節柄之儀別而御構不申上毎度失敬之事共御免可被成下候其後水府老公へ御文通被成候處御返事参り内、爲御見被下委細拜承仕候右ニ付段、御心配之條々逐一被仰下實ニ御大事之御時節晝夜不安寢食次第御同意奉存候然ル處水府老公御書面にては此後如何と貴君御案思々召候旨御尤存候尤此儀は小生老公へ拜謁時、刻々御相談申候得共更ニ漏泄は不仕候間必御心配被下間敷候此義者既に先達而小生へ極御内話御坐候趣も有之候ニ付乍憚愚意耽と申上候處成程と御承知被成聊御動き無之萬事御出精可被成趣も被仰聞候只、御退隱之御身分ニ而厚御沙汰を以御登城被仰出殊ニ奥向へ別段御登城御相談筋等被爲在候段誠ニ別段之義今ニ相成品々入組談説紛々と相成種々被成にくき御事共にて御心痛等ニ而御辭退被成候様ニ而は、上は勿論水府老公御爲にも不相成則、東照宮へ之被仰譯も無之義と實ニ小生も心配仕候間乍憚愚意有体申上思召を相止メ申候間最早決而被仰出

義は有之間敷萬々一被仰上候逆も御免可有之道理無之候間此義は必々御心配無之様存候猶能々心得居可申候老公御書返上いたし御受取可被下候扱又今朝被仰下候此程之御内話落も有之付御用隙申上候様委細拜承仕候猶御用隙自是可申上候右申上度貴答迄艸々如此御坐候頓首

八月十七日

二白新涼折角御厭專要奉存候已上

一、公猶御思惟あらせらるに廟議和戰の兩端に分れ一定ならざるにより瞭然たる御發令もなく月日のみ押移りてハ愈御大事も迫りぬへく被思召猶又御見込之程を福山侯へ被仰合度と御暇日御問合せありしに右に記する御返答にて其後被仰越候事もなければ、公いたつらに御對話の折を待せられんよりはと此月末に至り、月日左之通御書取もて被仰進たり

先般罷出候節段々之御懇諭にて粗致降心候得共尙又及陳告度義御坐候故冗雜不文には候得共又々愚存書取入貴覽候間痴情氷解之御垂諭

希上候

此間御内話之趣ニ而ハ諸侯之建白相揃候上御決定之被仰出も可有御坐哉之由左候得はいつれに來月にも相成可申と被存候諸侯之建議も畢竟和戰之兩途より外ハ有之間敷事に御坐候たとひ其餘如何様之儀申立候にもいたせ於公邊已ニ必戰御決斷之御義候ハ、一刻も早く不被仰出候半而ハ元來之御手後れ彌以御手後れニ可相成哉と致恐懼候乍併實ニ於公邊御必戰之御覺悟にも被爲在候ハ、御含蓄之御英氣何となく世上へも發露可致哉之處今日ニ至る迄墨夷渡來已前同様依然たる形勢にて具足師坏之致繁昌候迄之事ニ御坐候依之竊ニ致恐察候處水老公并閣下等ハ必戰之覺悟被決候得共一体之廷議或ハ和或ハ戰衆議紛然と相成居候哉とも被存候和戰之兩議交も行はれ徒に日月押移り終ニ墨船渡來之期に至り候而ハ當夏も同様にて和降之外ハ無之事と相成可申候得ハ誠以御大事千萬之事候故たとひ必戰不服之族ハ立地に御黜罰御坐候而

成とも早々御英斷御坐候而御旗本を始勇銳作振致候様之御仕向け有之天下之御處置におゐても都府之片端より人家御取拂ひ大城之銅瓦を引剥き巨礮御鑄造被成候程成大英斷非常之御取行ひを御示し被成戰闘一途に被決候得ハ士心争てか安逸を盜み可申自然奮發可致儀と被存候唯々一日も早く被仰出有之將士之心志相定候様致度摸稜之間に時期相後れ可申歟と御案事申上候

一近海防禦之爲江川太郎左衛門へ被命炮臺建築被仰出繩張出來候由承及候付家來之者差越一見爲仕候處夥敷御仕構へ之由海中すら右様之御次第候得ハ内地之御備は猶以御手厚ニ可被仰付儀ニ而追々其邊の御運ひニ相成候と難有奉存候事御坐候乍併兼々申上候元帥を不被建候半而ハ御固も御備も魂入り申間敷候元帥の謀略より出候地ハ彌繩張候へハ勝算も其内ニ備はり可申候得共先後倒に相成何事も半表半裏之際に相定り夫を以元帥に指揮を被命候ハ、馬乘に猿廻しを爲致候如く得手違

に相成其人之藝能も相著はれ不申而已ならず却て嘲りを招候様相成可申候是も馬乗りを負最に存候者計候得の氣の毒にも可存候得共過半の仕損しを待居候者も有之様にての内崩れに相成萬端埒明事に無之馬乗を出候からは金銀を惜ます好なる馬を牽入れ飼方馬具迄も十分に致し十分に爲乗候の如何にも見事に可有之夫故防禦の策を被定候に付而の第一番に元帥を被立地理要害悉く巡見之上元帥之指揮にて炮臺も何も相定候半而の役に立兼候の勿論に御坐候太郎左衛門之方策遺算の有之間敷候得共何卒一日も早く元帥を被建元帥并諸閣老を初再三御巡見之上御治定相成候の名實も正敷御安心之御儀と奉存候炮臺守衛之向も快心死守志に相成可申候夫に引かへ一ト通り之御普請處同様繪圖面仕様書等にて御指圖濟と相成或は御見分有之而も先例規形を以威儀嚴重成計にての刻限而已押移り隅々迄の御見分も不行届と申様なる事に而の何とやら御手薄の事にて炮臺の儀に付不服之族の後言喋々敷相

成遂にの不安心之事之様に讒説行はれ候如く相成候而の將卒之英氣も折々不容易御大事にも可相成哉と不顧憚見越之儀共申述候此一擧之御所置方杯の別而士氣之興廢に致關係候事にて不一通成事候得の兎角一日も早く元帥を被建此邊之儀共御委任可被爲在御儀には有之間敷敷炮臺も餘り御大造之事に承り候得はケ様に御捨置被成候而の成功も無覺東大炮は猶以之儀と被存候乍併大炮臺場は如何様見事に出來候而も元帥不擧士氣振ひ不申候半而の所謂無用之長物には有御座間敷敷一諸大名之様子を相考候處氣を掛候向の武器取揃へ大炮鑄造家來共炮術爲心懸候位之事に而夫程にも無之も隨分可有之必死を極め防戦一途に志候向は定而可有之候得共愚眼にの見え兼申候御旗本之面々の猶以不相變柔懦にて銘々着具之心懸さへ致得不申向も有之哉に承り及申候御膝元御固め肝心之御旗本をケ様に遊惰に被成置何ぞと申セの諸大名を御遣ひ被成候儀の諸大名も快は存し不申趣に而候得は何分餘程の御被

舞に無之而の中々以早急御間に合候様に相成兼可申候一ト通り之事候への致出勢候處か上々之仕合ニ而武器鐵炮等無欠乏相揃候迄にて眞武之英氣の決而振興致間敷と被存候夫ニ付ても何分前書にも申陳候必戦之御覺悟早々被仰出度奉存候事ニ御坐候此儘尋常之御引立にて御事足り可申との御評議ニ而來春に至り臨時警衛被命御文段計の必戦萬一實事と相成争端相開候而の衆力も一致の場合に相成間敷迎も立派之防禦出來可申とも不被存江府の御敗衄必然と奉存候夫社通諺之なま兵法大傷之基と申如く御不安心之者を御頼被成御取歸しも難出來御大事に及ひ可申歟と致恐察候不教民を以戦ふと申如く將卒を棄廢し皇國の神民を面視に汚され候半よりの願通り御許容にて當坐やかないの御平穩の方も相勝り候程の儀と奉存候何分來春警衛可被命向の一日も早く必死之覺悟を極候様御鞭策にて持場等をも御渡ニ相成候ハ夫ニ付面々心算も相定り一手限り之安心も出來一途に防戦を勵候心得にも可

相成儀と被存候此躰ニ而の小生ニおゐても死地不相定候哉必死之覺悟も付兼申候故諸大名諸御旗本之心中も致想像益不堪憂勞候故被仰出を待兼指越候儀共申上候段不惡御汲察御容含可被下候以上

八月

九月朔日先達而墨夷呈書ニ付御垂問之御答書被指上候節夫ニ付被仰上儀も有之ニ付牧野殿へ御逢對之儀被仰入候に于今兎角之御返事無之ニ付至急に被仰上度義に候ひしかの最早不及御逢段今日是を御斷り被仰遣たり

一、九月四日福山侯より右之御答かた／＼被仰進候趣さの通り
追々秋冷相催候得共兎角不揃ニ候過日の縷々御建白之趣具ニ拜承一々御尤之義と奉存候猶得と勘考致候間左様御承知可被下候乍序内密申上候此度内海御臺場出來相成江川太郎左衛門引請夫々取調候處下曾根金三郎殊之外不平に有之種々と申ふらし候哉之よし何る同人にて別段の

良考も有之事候哉當時之場合只々流儀争ひ抔仕候時節に有之間敷小生家臣も同人門人も有之江川門人も有之貴家にも金三郎門人數輩有之候間何ぞ御聞込も可有之歟却而同人爲にも不可然と存候間貴君御同意候の、金三郎を得と申談同人見込をも承り可申と存候得共如何哉御内談申候家臣も毎度世話にも相成候儀其儘捨置候も不本意ニ付申進候其内拜眉萬々可申上と存候得共殊之外御用多にて何分寸隙無之追々延引相成申候其内猶可申上候艸々已上

九月四日

一、公形の如き御憤發にて福山侯へ再三仰入れられしかとも 廟堂は依然として改新作興の御發令もなければ 公いよ／＼堪兼給ひて十月に至りて猶又如左福山侯へ御建議あり

福山侯へ海防ノ儀建議

愚衷

毎々申上候儀に候得共振古未曾有之御厄運相迫り候御時勢に而夜以繼

日之御至誠萬事御評議有之天下振興仕候様之 御英斷被仰出無之候半而の相濟不申儀と晝夜渴望罷在候然る處當夏異船退帆より百餘日相成殊に 御代替も被爲濟候の、別段被仰出も可有之儀と竊ニ相樂罷在候處於今御勇斷御發表も無之實に日月荏苒押移候而已ニ而誠ニ恐入候より外無御座候當時之形勢有志も解体士氣作興不仕逐日如何共難仕可相成は眼前に而事ニ臨み於 公邊如何様御引立被爲在候共いかてか戰爭に當り可申哉必敗虜可致彼の數年戰鬥之中に長シ猖獗の申迄も無之精熟は勿論之儀ニ御坐候就而の何卒早速御決評有之先日も及建白候通り第一之元帥を被立先主於諸葛亮ことく内外萬事御委任御坐候は、神州全國之和魂振起必定御嚴備も相立可申と奉存候左も無之此儘來年に押移り西洋各國の致渡來様相成候は御權道も難被行無御據遂には一同へ彼等之情願御許容相成候様の御次第ニ相運ひ候而の乍恐 徳川家之御武徳も失墜可仕義と存詰罷在候故庸愚蒙昧之愚衷も申上候儀ニ御坐

候吳も元帥御決評無之候半而の何れの道にせよ相濟申間敷且又幕府の御摸様を推察仕彼是申上候儀の必竟出位之罪多候得共今以御勇斷被仰出無御坐儀は衆有司議論區々に相成居儀と奉存候交易和議を唱候者も多く又必戰固守を希望仕候も半に過居候處を御果敢取難被成儀と奉存候此度諸侯建議も右同斷に可有御座候得共英斷の乍恐上様の不及申上閣老邊に而御定議無之而者誰有而裁判可仕哉當前江戸之人氣并諸侯之落付御旗本之様子而已を御斟酌人氣穩にて御嚴備相成候様之御所置は御六ヶ敷儀と奉存候熟世上を觀察致候への實に昇平無事之常態に而士心摧折凌夷諸侯は困弊不備六月以前へ事替候儀無之依然平に實に望洋之歎而已に御坐候又此体に而必戰之被仰出而已有之候共更に天下安心も不仕防禦固守も難出來當夏同様之爲体に相成可申の必然と奉存候當今敵國外患迫于前後艱難之御時世別而御初政と申 神祖を奉始御代に之御遺志御躰認被爲成早々非常の 御勇斷を以今日昇平之御勤勞

は萬端御放下に而軍政のみ晝夜御勉勵必死之御勢御示御坐候の天下心服士氣勃興は必然と奉存候左様無之而の數所之炮臺幾萬の大礮も御費用のみ相係り所謂無用之長物と奉存候 御引移も近に被爲在候御儀故又此機會被失候而者愈以御手後にて被成方も有御坐間敷と晝夜御案思申上候餘り再三陳告仕候不相變忌諱不敬之文段は御海涵可被下候以上

十月

御名

一、十一月朔日福山侯へ御留守居之者を被召呼て亞米利加國書翰之儀に付建議之趣各途熟覽集議參考之上達 御聽候處諸説異同あれとも遂に和戰之二字に歸着し且銘に建議之通防禦筋御全備にも至らされは彌來年渡來之節は御聞届之有無は御申聞なく成丈ヶ平穩に御取扱あるければ自然彼より亂妨に及候節不覺悟之次第にては御國辱にも相成へきなれば防禦之實用精々に心懸面々忠憤を忍び義勇を蓄へ萬一彼を兵端を開候の一

幕府武備未
整ヲ以テ異
船平穩ノ處
トスヲ探ラシ

奮發毫髪も御國体を不汚様舉而心力を竭し可勵忠勤との上意之旨御書付を以被仰渡たり此後は將軍宣下等之御祝事指湊ひて幕府の御多端も差見えたれり公も被仰立事もなく又被仰出事もなくて此年は暮にたり

昨夢紀事第一卷終

昨夢紀事第二卷

墨船再渡水
往復

嘉永七年甲寅年歸りて物事改まり賑はしき景氣にはあれと何となくうら安からぬ江戸の海の春色なりしに正月十一日早くも異國船伊豆國の大島沖に見ゆるよし風聞あり十二日になりての異船四艘已に浦賀近く迄乗入りたるの聞えあれと營中にての只管穩密隠カにして不定之体に取りなされたり此夕には今曉相州の三崎へ乗入たる注進之早船龍之口に來れり十三日にの大道寺七右衛門を福山侯へ遣はされて御調らへありしに異船退帆の旨下田より届あり浦賀よりはまた何等の届もこれなきよし公用人の申處も曖昧たる事なりけるか公は當春渡來之事はおほし設け給ふ御事なれり内々の御手配夫々御指圖あつて驚かせ給ふにの坐さねと幕府の御様子あまりにけしからぬ御次第故例の水老公へ被仰進たる事左のことし

愈御勇健被爲渡重疊爲天下奉恐賀候然者巷説にては異船最早海口へ
 到泊と承り候素此度のは合同國にて候や又外異船か其處も存不申候乍
 去兎も角も 公邊之御所置只々御一大重事の御儀と竊に彌不安寢食御
 案申上候昨日承候處にて例之御隱密と申事世上人氣動搖不致様との
 御主意に可有御坐候得共深く相考候への昨夏の如く又々内海へ乗入
 候形勢にも相至り可申と存候其節至り俄に諸侯へ夫々被命場所固メ
 相成候而の却而倉卒之事に相成人數配り初行届不申儀も可有之哉夫の
 ともあれ被命候而出張申候の内如何体之不測之患難可起哉も是亦
 難相分奉存候間夫々は只今之内に早々夫々へ被命場所割渡相成候方却
 而乍恐 公邊御爲にも可相成と奉存候細川長州立花等の猶以之儀被命
 候儀不承候故猶又申上候事に御坐候只世上動搖を御畏懼被成候而諸侯
 へ固メ不被命次第により俄に被仰付候而の猶々動搖の御掛念にも相響
 き可申歟と奉存候乍恐千々萬々動搖御心に被懸安んし居候様千百之諭

告被爲在候共逆も人心安氣不仕の勿論に御坐候町人百姓の宜候得共武
 士が 公邊之御仕向之通り安心致居候而の此御時態實に不相濟儀と奉
 存候間旁以前件愚衷も申出候事に御坐候此段心付に付密々奉謹白候御
 同意被爲在候の至幸奉存候其上之御採用御棄捨の御賢慮次第と奉存
 候何も艸々頓首恐惶謹言

十三日 水戸前黄門公

御實名

一、正月十五日如例御登城ありしに營中何となく騒かしく見えて昨日は亞
 米利加國之蒸氣船四艘軍艦六艘浦賀港近く渡來せる注進ある由因州侯御
 物語あり水戸殿にも御對顔ありて老公を御傳へ之由にて御渡ありし御書
 面如左

伊豆之方の帆影も見え不申由候處只今早飛脚にて浦賀を申來候の昨十
 四日辰上刻浦賀へ來り御番所を乗越可申体の由軍艦十艘之内火輪船四
 艘と申事やはり去年六月の船の様子のよし

水當公ト營
中ニ應對水
老公ト往復

公御一覽之上早速被仰知たる御禮脱カ御申上ありければ水府公此末如何可相成哉貴所にも御人數等御指出可有之哉と御尋に付公誠に不容易御一大事と相成候への人數等指出候儀は素よりにて何時たりとも出張差支なく候と御答ありけれの卿兼而御申付方も出来居候哉と御感心の趣故公猶又人數出張などの儀の當然の事にて申にも及はず唯肝心たる御奉公の出来兼候こそ恐入候へと被仰しかの卿誠の御奉公との如何にと問はせ給ふ故先祖已來二百餘年盛恩に浴し剩追々結構被仰出御厚恩之程海岳喩ふるに物なく且外諸侯と違ひ御家門之名を汚し罷在候事に候への幕府の御大事天下之安危に關係の秋に當り不及なから御爲に相成程の忠勤可仕心掛も無之只碌々として人數位の心配仕居候儀何とも不忠之至極と存候か卿にの如何在すにやと被仰上しかの卿も御尤の思召御同然思召由御答ありしとそ此日は御退出直ニ田安御館へ被爲入候が右異船の模様從營中御直筆を以被仰遣兼而被仰付置候通り御手配り油斷ある間敷との御

事なりき田安御館にの御能ありて御見物旁被爲入候御事故御館にて御紙筆を被爲借水老公へ今朝當公の御傳書之御禮も被仰上且目今之形勢に付而の徒らに平穩をのみ不相唱諸大名へも人數出張等之心得被仰出可然哉杯被仰遣御歌を添られたりことふねの浦賀の沖によせ來るをしらてそ見らくにふの俳優老公の御即報如左

如論六花紛々春寒料峭之時益御勇猛令拜賀候今朝豚兒云々御傳申候ニ付縷々御念入候義奉存候今朝閣老の拙老にも明日の登城いたし候様申來候へ者海岸之義并持場く勿論京地御備等之儀舊年も度々申候得共于今何之御評判も無之候故又々可申達と認置候事ニ候たとへは大手へ人を集めさせて搦手を打入候杯の古今有之事に候得者浦賀のみに心を用ひ候への大坂若狹等より入候事何共難計存候への是も可申達認置申候事にて尙貴兄ニ而も持場々々の義御申越故心つよく明日は可申達存候尙此上も御心付有之候の無御伏藏御申越に致度候此度の鑑

金澤に滞船の由に候御申聞之通り廿ヶ年前より拙者數度建白致候處其節に御備出來居候へり何も憂も無之候得共今に相成候而も及不申殘念之事候何分唯今之處にての相成候たけ年月を延し置其内御手當有之外の致方も無之候先ツの極密御答申候草也

即刻 松越殿

水隠

二白御端書忝存候何分春寒御厭武備御世話有之候様にと奉存候乍毎度御秀咏令感吟候御返しに狂歌認候

此度は備なければ先つ歸にし

又こひすみによるのあめりか

御一笑く呵

御別紙

元日貴詠之御答之本文認落候故又御一笑に認

異國の艦こそ拂へ峯の風はるの霞のさもあらはあれ

前同断

御秀詠何れも感吟いたし候筆の序に又

いさゝらは我も波間に漕き出てあめりか艦を打や拂いん

前同断

有志の此世態水心候得共御守殿杯はいつも變候御事もなくはご手まり杯其御住居も同様と奉存候夫に付拙老手まりうた作り申候是も筆序に認候 通俗にハまさり可申歟

一ツとや 人の國より我國をく治めん事そ初なるく

二ツとや 文よむとても武夫のく心しなくは何かせんく

三ツとや 湊を初備してく城の内まで守らなんく

四ツとや 世に住民の日本のく深き恵を仰知れく

五ツとや いつもかはらす我國はくよそより起る君はなしく

六ツとや むくらの宿に住とてもく心にかゝる事はなしく

七ツとや
 何は置ても我君とく父と母とはうやまはんく
 八ツとや
 八つに我身はさかるともく赤き心を世に残せく
 九ツとや
 心動かぬ物ならく是よりつよき備なしく
 十ツとや
 豊芦原の中つ國く浪は立せじ春の風く

又

一二三四五六七八のやまと心を種となしつ、春の初の汚れ濁りを
 さくるならひと異端邪法の國賊あたまに似たるまり故はるの風とて
 一二三く四五六七八九十大笑く呵くく

岡場ノコト
仰出サル

一、正月十六日今日となりて、異船追々浦賀以内へ乗入へき趣なれと事立
 へき様にも聞えず世の中も去歲に變り穩なる故當時の廟議は如何なる
 にやと密に大道寺七右衛門を奥御右筆の黒澤正助殿へ被遣御内調ありし
 に此度の兎も角も精々穩便に御取計らひあつて戦闘に及はざる様の御
 廟算なるよし夫故諸家の御人数も出されて濟へきにもあらんかされと此

事ハ極内評にて表御人数被指出事ハ御登城の上御達あるへき歟又ハ關
 老衆の御宅へ御呼出にて御達しあるへきか兩様の内なるへし異船も昨年
 と違ひ甚穩なる由を物語れり

一、此夕西尾侯ハ御留守居の者を被召呼内海御備之御人数御指出の事は其
 節に至り御指圖あるへけれと御場處の儀ハ芝邊と御心得あるへき旨御書
 付を以て御達あり公是を聞き召芝邊と計にてハ餘りに據なけれハ猶指
 定めたる場所を伺ふへしとの御沙汰にて翌十七日御留守居共ハ西尾侯へ
 伺ひたるに増上寺大門前と御指圖ありかくてハ敵の旗色も見えず疎遠の
 場所にて御不本意思召ハ金杉通り町家御取拂ひにて魚揚場御渡に相成歟
 又は濱御庭御警衛被仰出候様十八日朝西尾侯へ御出にて御直達被遊たり
 一、正月十八日才老公へ被進たる御内書左之通り

窃に當路の向ハ承候處にてハ今般渡來の異國人は素々願意通りも有之
 事故云々渡來何んの素願二三ヶ條其通りにさへ相成候ハ、必定平穩に

て戦闘の場合に至り候儀十ニ八九も有之間敷云々深考仕候への已ニ去年七月長崎へ到泊之ヲロシヤ人十一月比一旦及退帆候後再渡以來今に退帆もいたし不申平均七月半年も相立候儀且又魯夷へ御返翰眞偽の儘に不相分候得共世上に流布仕候のを致一見候處にての御代替被仰立四五年之時日を御延緩被成候御趣向と奉存候委細は不存候得共魯夷夫にて致心服候哉不存候得共致心服候は猶以此度は御重事と奉存候趣意の遠隔之魯夷の云々御所置眼前之墨夷への萬一云々之御許容等有之候而者第一いかにもヲロシヤへの御信義甚相立兼候儀と奉存候先魯夷御許容有之候末墨奴へ御許容相成候の、同じ御國禁を被破候御所置にても宜候得とも日本之御國法を守り長崎へ渡來之魯と別而猖獗之墨奴と釣合相違候而の甚以御事魯西亞必然含激怒浦賀へ入港強願いたし候哉又直ニ打入開兵端候かの二ッ一ッに御坐候今や浦賀へ墨舶迫り候とて魯が初に御免有之候而の不相濟儀と奉存候素が於小生の機密深

重之御趣意の不存當路某之嘯と流布御返翰とを比較申上候事ニ御坐候間御寛容被下度候何も又々不願憚犯虎威早々頓首謹言

正月十八日

固場所替仰
出サレ

一、正月十九日品川御殿山へ御場所替被仰出たり此件并防禦之次第等種々御伺ひ御取計ひありしの御記録に詳かなれの爰にの其概略を記しぬ此御場所替之御直達は閣老衆にも殊に感服ありて被及衆議候處何れも間然なき儀とて加州侯と御場所替ニ被仰出たる由天下一統に如此ならの異船不足患との評判なりしとぞ

一、異船追々に觀音崎を乗越て小柴沖に停泊し平穩の様にはあれと夷情難測故にや萬一異變に及ひな於火消屋敷板木打立夫を萬石以上火の見櫓有之向々場末迄打繼候様にいたし夫を非常の場合と心得へき旨なり御觸ありて人氣も何となく騒ぎ立たり

一、正月廿二日暮時過西尾侯へ御留守居之者を被招呼先つ一番手の御人數

を物靜に被指出候様御達ある故兼而御調之通り一番手を被指出品川東海寺を宿陣と定められたり

江川太郎左衛門覺悟

一、此日江川太郎左衛門殿へ異國船萬一内海へ乗入儀も難計其節の太郎左衛門殿早速出船ありて誠心を以申諭乘戻候様可致旨を被命たりとそ仍之晝夜濱御庭に詰居らるゝよし聞えたり

太郎左衛門殿の豆州葦山の御代官にて海防縣り御鐵炮方を兼られたり外國の事情に精敷蘭學をも心得られて近年外寇の事に付ては日夜心肝を碎き必戰を期し忠誠膽勇 幕府諸有司中之隨一たり仍之 幕廷の信任を受けて如此特命をも蒙られたり此人の股肱之手附齋藤彌九郎も同敷伴ふて出船すへき手筈なりしか事果て後彌九郎太郎左衛門殿にいへるは彼時僕か心構へは君の彼理を論し給ひて彼若固く聞入間敷状を見届たらんには矢庭に彼理刺殺して仕舞んと覺悟して御供に待ひしなりと申せしかは太郎左衛門殿打笑ひ余もいかてか彼理を論し得へき其期に

至り聞くましきも必定なれの彼應答の語氣を察し一刀兩斷になしてくれんすとの心算なりき汝に先はさせましとおもひしなりとかたられしよし彌九郎師質に物語りき

一、正月廿四日水老公へ御直書を被進しに例の御朱書の御返報あり共に左の如し

水老公ト書
通往復

一、翰奉呈陰晴不常寒暖未整之時先以倍御清安被成御起居欣賀不啻奉存候然の異舶先ニ平穩之趣に候得共世上巷說紛然應接も無之由承り申候如何相成候事哉實に不安寢食甚以苦惱切齒積胸之至奉存候此品到來合候付奉拜呈候萬々一御笑留も被下候の、幸甚之至奉存候將又先日以野書相伺候儀如何御坐候哉御序之砌是非御教諭奉希候誠に馴も不及舌候得共萬一加奈川にて應接等相成候而の彌以乍恐 御武威失墜之端緒と奉存候何も近日之御様子御見舞申上度艸々頓首謹言

正月廿四日

尙々時下御自玉爲天下奉祈念候被命昨夜品殿峯へ人數差出申候左様御承知可被下候以上

（以下二十二行朱書）

朶雲拜誦如諭陰晴寒暖不定之候愈御健勝被成御起居并賀不雷候墨夷渡來之處應接も無之御切齒之由御同意御坐候舊臘御書中ニ而御下問之趣御催促得貴意候得共愚老之存意を申進候へん全く一己之了簡をも 廟議如此と御推考にての指支候故是迄御答も延引いたし候扱異賊渡來已前に候へん大船大礮等一日も早く御製造急務に候得共今日と相成候而の所謂猪を見て矢をはぐとやらん何事も御間ニ合ひ不申候公邊御始諸家之手當全備とも不被存候へん此方々打拂戰爭を挑み候へん長策に有之間敷候乍然異船長く逗留之内我は空敷奔命に疲れ其上士卒外に暴露一統不戦して疲弊いたし候儀甚致懸念候つらく考候に彼は河伯の如く水中にてこそりきみ居候得共陸地にての何程之事可有之哉されは我海岸等虚飾の陣を張居候よりも山陰木蔭等に休

息致居時々行列正しく海岸見廻り晝の木の間に旗小印等奥しれす見せ夜は松明等樹間に耀き候類にいたし銳氣を養ひ扣へ居異賊上陸亂妨致候は、速に出張或は進て戦ひ或は偽て弱を示し彼乘し來候處にて大小筒戦士夫々引分ケ處々打て出候へん必勝無疑奉存候夫迄の彼々おとし候共聊頓著不致退屈いたし候様仕向ケ度事に候彼も中々容易に上陸亂妨の致間敷候歟右は全くの愚存ニ候得共過日殿峯へ御人數御差出のよし實地の御参考にも可相成哉と御懇意故吐露致し候也

正月二十五日

水隠士

二白何寄の品御投送令多謝候此品如何敷候得共御報の寸志迄ニ令呈進候不盡

一、此頃の風説にては異船平穩にのあれと彼か申出たる事の退引ならて應接場所の事も彼是と難題申出て決しかたく漸く二十五日に至り浦賀の屋

形浦にて初度の應接ありて饗應の御料理を下されたりとそ此節の應接掛り全權の林大學頭殿井戸對馬守殿にて井澤美作守殿鶴殿民部少輔殿等も被差加たり林祭酒は應接已前に高の知れたる夷狄の輩何程の事あらんと蔑視廣言せられしか初度の應接後は俄に臆病神立添て彼かいふ處甚理あり申に任せずしては御大事に及ふへし東照宮再生し給ふとも御任せの外はあるましとて周章狼狽せられたれの大事を誤られたる而已ならず大に世の非笑をも請られたり使節は兎角して江戸へ参りて執政衆へ對談せずしての事就りかたきの各國通例なる由を申立又此方にては一步たりとも遠き處にて事を濟せんとの商議にて事の外に指続れたれとも遂に横濱の海邊に假屋を設て此後の應接あるへきに事定まれりと聞えたり

一、正月二十八日巳上刻比バーテラ船七艘各十四五人程つゝ乗組大森沖迄乗入測量いたし追々品川邊へも乗入へき様子のよし川口御番所より注進に付同夕方溜詰衆不殘水戸老公にも即刻御登城相成候様御遠ありて營中

以の外騒動せりとそ

一、去ル廿五月初度の應接の時彼が通信交易の事を斷然として申立否といはすまじき勢なれの此事御許容なくての再度之應接難適趣林祭酒初を追々幕府へ申上へ付二月三日幕府が早馬を以林祭酒井對州江戸表へ被參候様被仰遣兩氏の四日の早曉に神奈川驛を立て參府あり幕府の廟算は御許容の有無は追而從是可被仰遣との御趣意の御返翰にて幾重にも穩便に相宥め江戸への入れ立すして歸帆せしむへしとの義なれとも應接方への御許容の有無を申聞せては三四年を限りても申延すへき工夫はなし彼已に通信交易は故なく御許しあるへき事のやうに心得たる趣なれの夫たに御許あらは此儘にも歸帆すへく又兼而御評定ありし御返翰の趣を申聞なれ直に江戸海へ乗込閣老衆と對談に及ふへく其上にて御許しなくの兵端にも至るへき勢なる故應接方大に困究の次第なる由風聞あり

一、二月朔日此頃の形勢ニ付福山侯へ被遣御直書左之通
態々一翰陳述兎角寒暖不揃之候先以愈御清安被成御勤務珍重之至存候
然ハ異船追々内海へ乗入或ハ小船を以品川邊迄罷越海底淺深致測量候
杯實ニ御國法を輕蔑仕候義にて日夜苦惱切齒之至奉存候右測量仕候
事故追々品川内迄も乗入候所存にて可有御座右様之形勢に至り候儀ハ
實に狡猾不届之次第ニ御坐候是非此處にて何とか御所置筋無之候半而
ハ實ニ恐入候外無之奉存候殊に當時平穩と申奥儀之深慮計兼候得共此
内彼より兵端を開らき候と申にも無之候共不法に上陸致候歟又は空炮
を打懸候ハ如何之巨患相發し可申とも更ニ難相計奉存候其上品川備
場へ往來仕候家臣共々承候而も都下平に繁華之趣右は全く御鎮撫之御
趣意にて重疊之義と奉存候得共所謂寢耳ニ水之譬諭之通り彼ハ脱兎の
勢を示し候ハ一時に擾亂可仕大厦の覆一木の支る所にあらざる勢に
可相成奉存候得は今一際海岸御嚴重ニ被成置都下へも何とか覺悟御示

し之上異船へも嚴重御諭告御座候様仕度義と奉存候只々平穩と申内に
一異變等出來致し候様ニ可相成哉と實に積胸御案事申上候餘り相認候
定而於公邊而は深重の御趣意可被爲在候得共傍觀いたし候而相考候
ハ片時も不安御儀尙又深御勘考被下候様奉存候只々御大事之御儀何
共絶言語候要用而已草々申縮候不悉

二月朔日

野村淵藏
情探索

一、高知稻葉務此即江戸表之形勢爲聞調家來野村淵藏と云へる者を指出し
たり此者聊文才もありて事情探索の筋等心得たる男なれハ主用といひ旁
此者を雇ひ細作として神奈川邊へ罷越居彼地の模様承り繕ひ可及密告旨
二月三日付ニ申遣したるに其後追々の注進如左

一、正月十四日朝之内小軍艦壹艘總州天神山をさし乗入竹ヶ岡沖ハ本牧
小柴をさし乗込八時頃小柴沖に舟懸り候由
一、夕方與力近藤良次彼船へ罷越何分舟を浦賀迄引戻候様申聞候處彼の

返答にの大将より此處迄乗入居候様申付候間此は少も不動由大将の跡の大船に乗居候間夫を指圖有之候への何方へ成共參候由返答

一、十六日九ツ時頃を八時迄に小柴沖迄軍艦三艘蒸氣船三艘乗込尤北風強き故帆下し蒸氣船一艘にて軍艦一艘ツ、綱を懸け引入候事

一、同日夕方與力彼舟へ罷越候處與力杯の懸合不致候付明日長官參候由申述罷歸る

一、十七日組頭黒川嘉兵衛并與力中島三郎助笹倉藤三郎近藤良次郷原伊三郎通し者辰之助徳次郎同船にて乗入九時頃を暮時迄應接有之由其大意は近日長官之者罷越鎌倉におゐて御返翰御渡有之候間何分浦賀外へ乘戻候様申聞候得共一向聞入不申彼の方に江戸の方へは何れなりとも參候へとも浦賀外へ引出候事の承知不致由

我國の

丑十月十六日彼國出帆

十二月十三日香港へ出帆

正月十日琉球へ出帆

一、^{十カ}廿九日朝八時比を井戸林伊澤鶴殿松崎其外與力同心追々神奈川へ罷越

一、廿五日屋かた浦におゐて應接有之彼初を神奈川邊にて致吳候と申張浦賀外へ出候事を承知不致故左様候へ、先ツ見分として參候様申聞候處漸承知致し見分旁應接有之由其節彼申に、此處の場所狭く献上物陳ね候處も無之間何分にも處を替吳候様申我方を而の何分にも此處にて致度儀を付いろ、申諭候處廿七日にの何とも申さず潮田沖迄乗込候由一、右應接之節漢文を而書取指し出候文意の未だ不詳候得共使節を御返翰受取に參候趣を認候様子御坐候文も相應に出來認め餘程見事と出來候而清朝人も參居候由

一、右應接之節種々響應有之我云御返翰も追而此處にて御渡可有之段申聞候處彼云何之國にても書翰受取渡城下を而致事 何分にも江戸の

方に而受取度申張候而不聞入故又、廿七日應接可致旨申聞相濟候由

一、彼云御返翰御渡之上の舟中ニ而開封いたし御答振により御懸合可致旨國王の申付置候と申候由

一、廿七日小柴沖へ懸り居候異船五時比の江戸を指し乗込五半時比富岡沖に碇を卸し夫々又乗込八時比より暮時比迄に潮田沖に蒸氣船三艘軍艦二艘外に浦賀沖に掛りありし軍艦都合五艘碇をおろし軍艦壹艘の小柴沖へ懸り居候

一、廿七日七時過押送り舟にて香山榮左衛門彼舟へ罷越此以後應接之儀の横濱にて可致申聞候處承知致候

一、此間を井戸對馬守初應接懸之衆の江戸表へ度々伺相立候趣意の通信交易御ゆるし無之而の應接難致段申上置候處朔日御勘定奉行松平河内守殿早馬にて神奈川驛へ被罷越一夜御評議有之處決評不致候ニ付被罷歸候而三日晝後諏訪邊八十郎早馬にて御使罷越早速井戸林江戸表へ罷

出候様申來り四日曉神奈川八時立ニ罷越候由

一、御廟策の兼而御定之御返翰之趣幾重にも取扱致候而江戸の方への何分にも不參様取計可致旨應接方へ被仰出候由

一、應接方ニ而者通信交易御許し無之而の取扱方無之且有無を不申聞候間三四年を延し候工夫の唯今の勢にての取計方無之候

異人唯今之處ニ而者通信交易御許し有之事と存居候由我よりのまた御返翰之趣不申聞候由

一、異人は彼か意に叶はず候時の返答も不致直ニ江戸の方へ乗込勢之由
一、四日御城ニおゐて御評定有之由右御趣意の通信交易御許しに相成候へは此なりにて異人退帆いたし候勢御ゆるし無之時の異人直ニ江戸表へ罷出御老中へ對面いたし存意申度候由御老中御對面有之候而も通信交易御ゆるし無之時の兵端ニ及ぶ勢之由

彼云何の國へ參候而も取次にて物事相分る事の無之執政と對談致候

得者直ニ決定致候夫故日本國にても御取次にては相分り候事無之何分にも江戸表へ罷越候と申張候由一つに江戸の繁榮を見度意も有之由

一、井戸林去ル四日晚に神奈川へ直ニ出張可有之筈之處今六日夜ニ入候得共出張無之此儀ハ江戸表御廟策御決評御六ヶ敷事故と奉存候夫故今以御決評之處難承候

一、六日夜四時前井戸林神奈川驛へ出張有之夫ハ伊澤宿にて御評議有之候

一、御廟策井戸林へ應接事御任せに相成候由其趣意ハ何分にも平穩に取扱候様被仰出候由井戸初應接方ニ而ハ御任せ無之而ハ取計方六ヶ敷御任せ無之事ならハ應接の儀御免被下候様申上候歟之由

一、彼へ之取扱ハ諸藩へ被仰達候御趣意ニ而精々申論候上其上之事ハ彼落付兼候勢候得者少しハ彼カ存意も御取上被成候而穩に退帆爲致度心

底之様子御坐候夫故此日は應接致候後にて何とか相定候趣意に御坐候猶又委細之義は追而申上候

神奈川形勢
内外船形勢
席會議

一、二月八日大目付中之御觸達にて異船碇泊中應接之模様により彼ハ兵器を開き候儀も難計ニ付警衛守備虚飾を省き銳氣を養ひ大小之筒配り方之儀は勿論劔槍手詰之勝負實地之接戦專一に心懸且小船を以神速の勝負ニ及候儀等も可有之旨被仰出大に士氣を奨勵あり此夕品川表御固場ハ鈴木主税罷歸りて昨夜熊本之藩士津田山三郎薩州藩士鮫澤正助主税へ逢對して警衛之諸家におゐても國体を墜すまじとの勢込かれハ屈下之應接に及はざる様御當家於て御主張あり度由を申出たる故幕府御廟策の様を窺ひたくて出府せる趣なり江戸表にてハ廟議の詳かなる事も聞えねは直に水老公へ御尋問あるに如くハからすとの思召にて主税を水府の藤田誠之進の許へ遣はされたるに誠之進のいへるハ此比井林二氏參府して通信交易御許無之而ハ彼不致承服事現然ニ付御許容無之事候ハ、應接之義

兩人の御断り申上度申出るにより已に御許しあるへきに決せし故老寡君病と稱して引籠られしかの廟議又變して強而出仕に相成二條共御許容あるましきに決し其段及應接自然彼の兵端を開き候の御不備なりにも兼而被仰出如く手詰之接戦可有之との御評議に而老公にも専ら御出馬の御用意有之由を誠之進物語に及ひたるよし主税罷歸て申上たりしに公にもさうあらんと頼母敷思召されて御固場之儀猶以油断致間敷旨被仰合て主税の御固場へ罷歸れり

一、二月十日神奈川表へ遣し置たる細作より密告如左

一、四日五日六日御評議之大意御廟策閣老始有司方異人之江戸表へ參候事と兵端に及候事の何分にも禁物又御國威をおとし候處も懸念にて御評議御決着不致由又御老公にも只今之處へ兵端開き候ての如何と被思召候哉被仰出事或の強く或の弱く相成候而御詞御一体に不相成御様子又應接方ニ而の井戸初決心致候而御評議に加はり候故問答餘程強く申立候様

子夫故か何分にも應接の事は御任せに相成候様子 或問曰應接何れの處へ落着候哉答曰御國威之處の精々落さる様取扱候へとも先只今之勢にての試として三五年も通信交易之分ゆるさす候ての落付不申と奉存候又問兵端に及候事を懸念に思ひ候事の彼を恐れ候故か味方を懸念に思ひ候故歟答彼之強弱練不練も如何と懸念に思候得共味方執柄之御方に被引受候仁かく候故若兵端に及候への其時の必通信なり交易なり彼か指圖に随ふ勢か相見へ候故也若左様に相成候への我より許すにはなくて彼か下知に随ふに相成り却而御國威を損候故是非なく右様之取扱に相成候又問老公に御任に相成候而如何答老公の何分にも御人和なき御方故諸候に随分被服候御方も有之候へとも有司方に半分も服居候者無之御老公之思召と申せの又かと申程の勢まだも閣老の命に服し候勢有之其閣老のかくいふたら人の氣に入らふかかくなしたら悪まれやふかといふ心にて互にゆつり合ふて一人として被引受候御方無之

候又問昨年諸藩初一統へ異人之御取扱之趣被仰達候事ニ致相違候而の却而憂か蕭牆之内に起候事の有之間敷哉答實ニ此處の懸念ニ候乍併此事のまたも國內之事故制し易き事も有之候と奉存候又問通信交易御ゆるしに相成候而のヲロシヤ初諸國を參り不申哉答いつれ參候か此にも右様に不致候而は承知致間敷と存候又問左候の、皇國は愈衰弊に相成不申哉答曰實に衰弊相成候たとへ人の勞症病を受たるか如し實に國家の大難病と存候何れ太平に居候事最暫くと歎息之至ニ候此上の一日も早く上たる御方に御引受被成候方無之而の、徳川家之御運の是切りかと乍恐奉過憂候是れ又別人問答

一、或問曰此度の何れ穩にて相濟候哉答曰此度の何分にも平穩に取扱候様被仰出候への先兵端に及候事の有間敷存候得共又御國威を落さる様にと被仰出も有之事候への又兵端に可及とも難分存候又問通信交易

御ゆるしに相成候而の其弊何れの處ニ及候哉答彼か心不奪不飽之利國候への通信交易を許候へ者二三年之處は必我に利をあたへ夫を追々彼か意をふるひ終には日本を屬國にも致し貢を取候迄に及候ても不飽之心底と存候誠に惡くしき事と存候併ながら誤は彼にあるに非ず我にあると存候への只我國の義氣の振はさるかなけかはしき事と存候兵端に及ひ候上の事は問もらしつ

此両密書兩人に相尋申候其人により問答表裏に相成申候左候は、執柄の御方并應接方餘程大切之事と存候令一兩度應接迄之處大機會と奉存候一、八日朝應接方井戸初横濱應接場見分有之晝後異人アハタムス外ニ士分二人水夫十人ハッテ一艘にて見分として參り場書圖寫取歸候由一、明十日應接場におゐて應接有之由附り彼か願意と我取扱候意と喰違事に候故何れ一度や二度ての趣意相分り申間敷と奉存候若右十日應接の趣意御承知被成度候は、十一日晚迄にしらへ申候間左様御承知可被

下候諸役人方何れも朝五時を夜五ッ四ッ或は夜中も掛り引取れそく相成候と付一向尋ね候間合無之候

右之書面早速入 御覽たるに 公仰けるは此比主税か誠之進を承り來れる趣とは懸隔の差違にて不可解之時休かれはと御家老共を被召出種々御商量ありしかとも可被成様も坐さねは此密書之趣を以今一應水老公之御手許御尋問あるへきとの御決評にて師實に明朝可罷越御旨を被仰付たり一二月十一日未明に藤田誠之進の許に到りて初而及對面たり扱此比主税か承りたると神奈川細作の密書と犬牙齟齬之次第を物語目今の廟議如何と推問せしに老公の仰せの次第の今以主税に告たる如くなれとも誠之進か遣し置たる探索方を承る處も同じ趣にて畢竟應接方と而は二ヶ條許諾相好居候事候への各老始の申され候事の不承知なから畏り居候ても又變遷も難計神奈川にての先日井戸罷歸候而も矢張和議の説被行候由と候への下戸の者へ酒を飲むへく申付候而も兎角酒をやめて菓子に相成候半も

難計此上は弊藩之老寡君にては六ヶ敷老寡君も參謀とは申條譬への外科醫者の如く刀鍼を刺し金瘡を縫ふ如き人の嫌惡する外療への用ひられ候へとも内服藥餌の相談への加はられぬ事多端にて不都合も不少其上耳遠にも候への事情の委曲に至つての聞誤らるゝ事もなきにしも候へす只今之處にての何卒越候の御周旋相願度候なり且不外御近親と申細川侯へ被仰談ともに被仰立候半への 幕府の御聞受もよろしからん敷といへり又云此比於屋形浦應接の節彼か申せし通交の二條御許容無之の定而國王の尊意なるへし貴所達の一存にのあるへからす若左あらんには承服にの及ひかたし實に國王の尊旨ならの其信牌を給はるへしといへるよし應接方に而の信牌を遣しての夫切の事故直様如何なる變事到來も難測林祭酒も大に困究にて分らぬ事を漢文に認て遣したる由杯を物語れり師實罷歸て右の趣申上たりしに 公御眉を顰せられ如何なされんと思召煩はせ給ひしか阿州侯因州侯の兼而仰合たる御事も坐せの左の通被仰進

前略然は今般異國船渡來昨日應接有之趣に御座候扱又先日水戸前君之御所置にて先々交易通信の御評議の相止ミ可申御様子候得共何分應接方ニ而の矢張兵端を相開候か又の江戸海へ乗込候勢にも有之故通信交易ニケ條御許諾之様に申唱候由神奈川探索を申越候

幕府御評議は前同斷にて御動搖の有之間敷候得共只管應接方右を唱候而の甚御大事至極之儀ニ而當今ニケ條御免許有之候への第一昨冬十一月朔日重き上意と申此間之御觸達も反古と相成諸大名へ被對御信義相失御代初の折柄之命令に御信義相失候而の誠以御大切至極之儀と奉存候間何卒右之義は明朝老中へ罷出及逢對尋問之上若御許諾等之口氣にも候の、抽精心申立度拙者壹人にての逆も相通り申間敷右ニ付今夕委細御面談申上奉存候間御同意にも候は、弊屋へ御光駕被下度候且又御兩公の内之貴館へ罷出候而も不苦候若拙宅へ御來臨の義にも候の、御繼上下ニ而御出奉希候尤御手間取にの相成不申候乍去其節鳥渡危飯

差上度奉存候右之段申上度用事迄艸々頓首

二月十一日

阿波守様
相摸守様

御名

右ニ付阿州候の未刻過因州候暮時前御出あつて被及御内談しに兩侯素々御左祖にて閣老衆へも今日御會議御同意之段被仰達様なされ度且自然閣老衆之口氣ニよては阿侯も御相對あつて御説破あるへしとの御談寄にて初更比御退散

一、公師實を召て 公にの明朝福山侯へ被爲入可被仰立候得共誠之進か申せし如く外様も申立候方可然細川家之長岡監物の聞えたる男なるか幸此節爲海防出府致居事かれの罷越可申談との仰ニ付師實申上げるは主税を嘗而承候は此節熊本侯へ御書成共被進御獎勵被爲在候様願はしき由夫も監物も拜見して參謀すへき様に被爲在度と監物より主税へ内談せし趣にも候への此度屈竟之御義にの不被爲在哉と及言上しかの 公もさる事あらんにの猶更の事かれは書翰をも遣はすへけれの師實にも明朝監物か

許へ可罷越との御沙汰ありき熊本侯へ被進たる御直書左之通り

一翰致拜啓候春暖の節先々愈御清安珍重奉存候然の異國船一件ニ付而は兼而御用被仰蒙候御義ニ而何角御配慮奉推察候夫ニ付此間の御觸通りも御座候而一統二百餘年大平ニ浴候御厚恩奉報謝候時節到來と憤發可仕義と奉存候然ル處何歟於公邊は交易通信の御許容にも可相成哉にも神奈川邊ニ而は専ら風聞も有之趣に致承知候昨年之被仰出と申此間之御觸達と申左様之義は有御坐間敷との存候得共異人之強願に被任萬一風聞之通り御聞濟相成様にての御國体も難相立而已ならず諸大名へ被對候ても御信義も相棄候儀ニ而誠以御大切至極之義と奉存候ニ付同席之内申談今日伊勢守迄存寄申達候事ニ御坐候右ニ付御誘引申上候に無御坐候得共貴家之儀は右御用も御蒙之義にも候へは何卒御國威之御墮墜に不相成候様被仰立候の於公邊も格別御力にも可被爲成哉ニ奉存候此末之應接誠ニ安危にも可相拘時節御坐候故指過候儀申

上候も恐縮失敬にも御坐候得共不外御間柄に任せ愚存之趣一應申上試候猶右ニ付存寄之義も御坐候得共難及筆紙ニ付御家臣長岡監物業の此度御用として被召呼候由承及候ニ付中根叔負を以愚意之趣委細申含候間御聽取被下候様仕度奉存候右申上度如斯御坐候恐惶謹言

二月十二日 細 越中守様

松御名

一、二月十二日 公福山侯の邸へ御出御指懸り被仰込御逢對ありて仰せられし今般異船渡來ニ付而の御所置振如何と晝夜不安寢食候得共昨年十一月重き上意と申此比は御觸達も有之次第候への定而御許容之可否不
被仰聞義との存候へ共神奈川邊の風説にての専ら通信交易御免にも可相成様子相聞へ候得の心得のために伺ひ置度と問はせ給ふに候神奈川邊の春説は碇泊も段々長引候故之難説にて取に足らず畢竟昨冬之被仰出も有之候への決而ニヶ條御免等之儀の無之との御答なる故いよ／＼左様ニ候半にはありかた致安心候と仰あれ候猶又御申にの亞墨利加へ御免許

無之筈なるの先比長崎表へ魯西亞渡來して同様の義を願出候故御代替御繁多の折柄なれの三ヶ年の御返答相待候様申聞承服之上已に及退帆たれの今更墨へ御免相成候而の第一昨年之上意も御食言に相成諸侯も屈伏仕間敷又魯への御信義も相立兼候得の彼も承り次第憤然として浦賀表へ可及渡來の眼前の義を而内外共に御信義にも拘り御許容に難相成候への此儀は御安心なさるへしとの仰ある故 公段も御申聞の次第にては降心之至に候得共猶又伺置候は萬一彼等江戸海へ乘入迫りて相願ひ候か又は兵端を開くへき勢に及ひ候而も猶御英斷之如く確乎として御許容無之哉又の左程の次第にも相成候節の 御國躰を被任情願に被任候への彼の喜んで可及退帆候是も一時之御權道とも可申哉又兵革を及ひ候而の公邊初御備向も御手薄の儀に候へのかゝる至重の災厄に被臨候への如何御心得なされ候哉只今の御英斷の難有候へとも萬一其節に至り御撓屈御坐候而の却而御國威を損せられ我が交易を開らさ候にのなく彼を開かれ

降參同様と申度は候へとも實の眞の降參と相成可申哉と御詰問ありければ候如何哉困厄之場合に及ひ候とも 御國威を損候様之儀は決而致間敷候への御心やすかるへし夫故にこそ昨年も重き 上意も有之先日之觸達も出候事候へは二ヶ條御免相成事は無之自然彼が兵端相開き候は、御不備之儀の今更不及是非候への不汚 御國體様一同奮發討伐に及ふへきは勿論にて其上之勝敗は唯今論すへきにも候はすと御答あり 公又今日相伺ひ候儀の同席之者共一同會合申談し何も同意に御坐候ゆへ惣代として拙者罷出候儀と御申ありければ候唯今御答に及ひたる次第御同席之方へも御申通しありて然るへしとの御挨拶なりしとそ 公も稍御心落居させ給ひて御歸殿の上阿因兩侯へも此由御直書を以被仰進たり 一今朝仰によつて師實熊本藩の長岡監物之許へ至りて此比神奈川の風説の如く萬一通信交易御許容ありての諸侯も可及解体趣海防當路之四家本 萩柳川が申立あらはる大に 廟算を裨益すへしと 思召を付幸熊本侯の御

近親にも坐せは御直書を以被仰進たる儀も有之監物へも御相談可有之條何分にも十分御昇力被爲在候様に監物相心得可致周旋旨の御趣意なり右尊慮之趣を監物へ申傳へたるに監物畏り乍恐御至當之思召と奉伺候へは候へも申上被仰談も御坐候へ、精々盡力可仕乍併三家之御方々へも被仰合候儀は如何可有御坐哉監物限りに奉畏段は難申上趣御請に及ひたり

長岡監物は細川家之長臣三家之一にて九州之名士なり文武の心懸厚く廉介剛正賢を愛し士に下るの聞えあり去夏來海防先鋒の惣督を被命此度手勢三百餘人を引率して弓鉄炮長柄等皆其手の足輕にもたせて數百里の行程を押陣の体にて參府せり長々の出府中陣中同様士卒と食を共にせしかの監物か手の從類は肅然として一人も不足をいふ者なかりしなり今は執政の職を辭して防禦の一方をのみ受持たれば周旋の委曲に至つては盡し兼る處もあるよしを物語れり年のほと四十未滿容貌溫和

小語低聲にして圭角更に表に顯はれすといへとも慷慨の氣あまりあり應答慰勲にして絶て大身踞傲の風ある事あし御兩家の御親睦の事につきても御内治御行届の事杯を申出て深く吾公の御徳誼を景慕し奉れり方今事務の談論等も漸其要領を得て只管國体の損せん事を憂ひて士氣の衰弱を嗟嘆せり

一、公御歸殿の上福山侯御返答之趣誠之進監物へも可申越旨仰によつて申遺したるに誠之進か返書如左

芳翰拜誦如諭昨日は始而得拜晤大慶仕候扱は御内話一條其君侯今朝福閣へ御出御存分御申達被成候處至極御尤之筋に承諾被致今更通信通商等御許容被成候而の外ハ魯夷内は列侯へ被對御信義を御失被遊候段台慮も有之儀故決而左様之義にハ不相成候間彼々不法之舉動有之候ハ其時こそ過日之御觸通り御心得可然云々立派の御返答之由元より右様之御懐との奉恐察候得共如何にも平穩々々と世上一般申ふらし候間

如何成平穩ニ成行可申哉と御同意甚苦心仕候處御立場がらの御方へ立派に右様御返答御坐候のみならず阿因兩侯迄の御傳達も御坐候上の實以爲國家恐悅無此上畢竟其君侯格別の御精誠に被爲渡候ゆへ右様體あなる證據を御聞被成候段毎度奉感服候右ニ付御廟算尙更御確定の御一助と御了簡被成御近縁之廉を以熊本侯へ云々の御打合せに相成候由逐一無殘處御義ニ御坐候長岡方の模様外三家衆迄の及ひ兼候由遺憾ニ御坐候得共長岡も漸々海防一手のみの請負にて醫者ニたとへ候得の外科持前之外の手を出し兼候様子ゆへ左も可有之とかく有志の諸侯有志の藩士の皆外科一偏洪嘆之至ニ御坐候此節立花侯老寡君へ逢被申度よし御申入有之處御逢の不被申候得共右様御申入有之上の定而和議御主張に有之間敷奉存候處貴考如何藤堂侯杯は専ら和議の論御申越に御坐候被懸貴意縷々被仰下大慶仕候御厚意ニ任せ燈下書ちらし候段御海恕可被下候頓首

二月十二日

二白福侯御答の立派の實ニ可喜候得共一昨日應接之風聞は扱々笑止千萬ニ御坐候尤幕の内の事の外官への分り不申候得共衆人の見る處如何にも不堪切齒候定而御聞も被成候半ばつていら廿八隻計にて乗込海岸を應接場まで一町計の處彼異人とも貳行ニ劍付銃にてびつしりと固め其中をベルリ夷等奏樂にて上陸此方から案内に出候ものも何となく彼等に警固被致候姿のよし扱又下官ども處々我儘ニ歩行小倉の陣所等へ入弓鐵炮等を圖ニ取其外婦人等追かけ候よし風聞虚實は不詳候得共苦々敷事共ニ御座候腹中に戦を含ミ顔色を和らけ懸合候ゆへ彼も自ら承服可仕處腹中も顔色もたますに計かゝり候而のますくのられ可申哉御覽後御投火可被下候

別啓一昨日應接之時墨夷中ニ此節死人出來候間海邊へ埋め申度願出種々押合候得共遂々彼か願通り横濱某寺へ爲葬候筈ニ答候よし最早御府

内近海の地へ夷人の墳墓迄の出来申候右をえんにいたし如何様の事を巧ミ可申も難計あまり御手ゆるき様奉存候是の其 君侯へ御申上のみ先御他言被下間敷候以上

又啓尾州殿には中々正論に被有候毎度感服仕候其 君侯を御一通被遣御月番之廉にて上田侯へ一書被遣上田侯を福侯同様之御答出候の、尙々確定可仕哉尾州への道路隔遠候得共當節の模様にての尾州往復位の日限の随分御間合可申歟と奉存候敵藩をさそひ候の容易候得共夫にての却而不宜様愚慮仕候分外の愚存御投火可被下候

靱負様 拜復

誠之進

監物か返書如左

拜讀仕候如論今朝は初而得拜願大慶不少奉存候扱今朝尊君上福山侯御應接之御摸様心得にも可相成と御委細被仰下候趣夫々奉敬承候天下之御爲誠奉恐悦候此方様思召之處の未だ如何様とも得貴意候程之處に

至り兼候間追而御摸様の可申上候先は貴答如此御座候不具

二月十二日

中根靱負様 貴答

長岡監物

二月十三日熊本侯の御返書を被進たり如左

花墨拜讀仕候如仰春色相催候處愈御安寧奉賀候扱異國船渡來防禦筋猶更心配仕候事に御坐候於 公邊交易通信御許容可相成哉とも神奈川邊にての専ら風聞の趣御承知相成萬一風聞通り御開濟に相成候而の御國体も難相立諸大名へ被對御信義も相棄候儀を付御存念之趣御同席之内被仰談昨日伊勢守殿迄被仰達候由右に付小子も相達候様有之度不外御間柄譯を以委細御懇書之趣難有奉存候御家臣中根靱負へ被仰合候家僕長岡監物へも御存意被仰下趣具に申出候交易通信御開濟にの相成不申様との儀愚存之筋へ去秋老中迄申上置候末に付猶相達候儀の得計勘考不仕候半而の難相成候處昨日伊勢守殿へ御對話交易通信御許容

に無之段返答之趣取負を監物へ被申越候通り直に申出右返答之通候へは重疊に御安心之御事ニ御坐候於小子誠大慶仕候異國船一件に御互ニ心配不少御事ニ御坐候先者奉復而已早略仕候頓首

二月十三日

公是を御覽して余か福山との應答ハ不知振にて細川も殿敷申立なの大廣間席の方へも余に等しき返答あらん事愈固定して宜しからんとおもひしに福山の事の余に任して共に安心せる趣なれ余か術計已に齟齬して行はれさりしとの仰ありき

一、二月十四日誠之進かいへる尾州公御徳憑の事も如何様にも然るへからんと思召されしかハ此日尾公へ被進たる御内書如左

一、翰拜啓春暖之節御坐候得共先以愈御清安可被成御起居と奉恐壽候然者是迄にも御動靜御安否可相同等之處彼是掛違御疎遠打過背本意候條多罪之至御海怨被成下度奉存候扱又異船碇泊罷在今度之儀ハ皇國之

安危分判之秋と奉存候ニ付而は日夜不安寢食苦惱罷在候事ニ御坐候然ル處方今水府前君は御參謀中其他ニ愚存之趣申上候程に御依頼之御方も無之尊君には右等之處兼々御憂慮被爲在候御様子奉拜承居候ニ付別紙愚衷申上試候間何卒御熟考被成下爲天下御配慮之程奉希候尤遠境往來之日數相掛り夫迄に可及退帆かも難計候得共今度は碇泊長引可申と申取沙汰に御坐候故及建白候事に御坐候先ハ右之段申上度如此御坐候恐惶頓首九拜

二月十三日認

尾張
中納言様

御名

以副啓申上候然ハ異船先月中旬比ハ碇泊罷在誠以不容易次第天下之安危存亡之分界貴前様には都下之光景御目撃も不被成候事故別而御苦惱不啻御儀と奉遙察候仍之態々申上度儀は前文申上候通り誠に御一大事至極ニ而萬一彼之兵威に御畏れ被成通信交易等御許諾ニ相成候而ハ昨

十一月中 御代初之折柄重き 上意之趣も有之事故天下之侯伯へ被對候而も御信義相失可申御信義無之候得の 徳川家之御威光の是限りと深く恐入罷在候儀に御坐候是等之處致熟考候への何分不失 御國体通信交易等之儀は 御許容不相成候様致度奉存候方今水府前君御參謀之御義に付思召通りに相成候の、小生輩遺憾無之候得共左様にも參兼候勢に相見へ累卵危殆之時と奉存候扱又小生方ニ而も苦心之餘り神奈川邊へ探索方遣し置候處彼將官ヘルリある者通信交易御許し無之候の、江戸海へ乗込及戰爭候勢を示し候由に而於 幕朝は甚御懸念にて体により通信交易御免にも相成可申哉と申事も有之由猶又種々相調候處本月四日に、井對林大等之應接方に而の何分二ヶ條御免無之而の應接出來不申段致決心申張候ニ付無據可被任其意哉之勢ニ相成候故 水府前君にも被成方無之被稱御病氣御引込に相成候由就夫御老中方にも評議變替に相成何分御病氣にても推而御登城有之様申來候ニ付再御出勤

御坐候處右二ヶ條御免之儀は御沙汰止ニ相成何分精々平穩ニ致應接二ヶ條御免無之趣に申諭候上にも彼夷怒つて江戸内海へ乗込候而執政へ逢度とか申立候の、老中方逢對被致同様諭告之積夫にても不承知にて彼兵端相開き候の、戦具あしといへとも可及戰闘 廟策に相定別段御觸達も有之趣に相聞候ニ付其程迄之御覺悟相立候儀の全く水府前公之御處置と難有致降心候處其後又々探索方相聞候趣にての廷議の右之次第候得共應接方之様子に矢張先日之有様にて何分應接方ニ而手強く申立候故か精々二ヶ條御免之儀は不申聞候得共萬一彼兵端相開き候勢江戸内海へも乗込候様子候への其節の無餘義御許容之積に申唱候様子に相聞候右ニ而の老中方之覺悟有之候内調とは更ニ天淵之儀ニ付何分分り兼彌増苦惱切齒一層を増申候ニ付精々相考候處方今水府前公御參謀中萬事思召通り相成候得への異儀無之候得共老中方ニ而も苦惱之餘り萬一右等之内評も有之事歟も難計ニ付同席共申合老中へ逢對

存寄申達右等之處承糺し度と一昨日阿波守相摸守拙宅へ申越右等之始末柄相咄候處尤同意ニ付昨日朝伊勢守へ罷越逢對之上存分申達候處返答之趣意は縱令彼々如何体嚴敷致懇願候而も右二ヶ條之義の御許諾無之夫か爲に彼々兵端相開候の、其節の昨年十一月被仰出并近比相觸候通相心得必死覺悟ニ而及戰鬪の勿論之旨唯今と相成右二ヶ條御免有之候而の第一昨年之被仰出も反古と相成且は魯西亞へ被對候而信義難相立候儀ニテ旁以決而御許諾無之筈候間其處の致安心可罷在此段阿波守相摸守へも相通候様にとの答も御坐候故漸安心仕候尤返答次第により阿州因州も追々相對罷越小生同様可申立積御坐候得とも右之通り立派之答に御坐候故先ッ當今兩人罷越候義の相止申候細川の如御承知不外近親ニ付黙止之秋にの有之間敷と申遣候事ニ御坐候先右之趣ニ而内にの水府前公ニ而御周旋有之外には諸大名々申立廷議之御一助にも相成候の、奉對 東照宮二百餘年之御恩澤を奉報謝候御奉公之片端にも

相成可申哉と婆心のみニ御坐候夫ニ付尊藩之儀は 幕府之御親胃の勿論にて殊更深く御忠慮可被爲盡候趣も窃に相窺ひ 大廷之御幸福不過之と欽望事ニ御坐候然ル處今般之次第は實ニ天下之得喪安危分判之秋と奉存候得の可相成は唯今之處ニ而尊藩の上 閣老へ當月々番之廉を以砭鍼之御一書被成遣候の、如何計りか 公邊御評議之御強みにも可相成儀と奉存候左候の、定而福山同様之尊答も可申上左様相成候得の福閣は小生輩言葉質を取置き月番之閣老は尊藩へ證書同様之御請被仕候様相成候の、廟算彌確定にも可相成儀ニ而國家之恐悅の不申及小生輩も盡く安堵至極ニ御坐候兎角應接專任之向にて和議のみ被行候様子ニ御座候故夫か爲に萬一 廟謨之御あやまりに相成候而の馴馬も難及御大切至極之御儀と奉存候ニ付不顧不敬失禮愚昧之拙策建白仕試候事ニ御坐候若又尊慮にも不相背貴毫御投與之御運ひよも相成候の本懐至極之儀と難有奉存候已上

一、二月十五日如例御登城あり於營中柳川侯へ御逢ありて此比阿因兩侯御談にて福山侯、御對話之御次第且細川侯へ被仰遣たる趣をも御物語ありしかり候も大に御同心にて幸ひ明日福山侯へ御相對の御序も坐せり其刻御申立あるへしとの御事なりしとぞ

一、爾後細作密告如左

十一日付

一、去ル十日横濱應接場におゐて應接有之四ツ半時比我より案内舟押送りにて罷越候九時前ハッテラ二十七艘にて異人四百人計上陸夫々二行にて廿四人組ケヘル持數組兩側に玄關口を海きは迄備居候程なく北より五番目の軍艦にて空炮十七發放し畢面白ハッテラにてヘルリ彼蒸氣船を參り上陸直に乗り參り候ハッテラ十艘程にて空炮廿發尤一艘に大筒壹挺ッ、長三尺計巢口三寸計に見へ申候暫くありて又十七發放し夫々小半時計にて樂初り兩方ニ而かはる／＼奏し十篇余も有之七

時前此より六番目の蒸氣船より煙を出し候七時過ヘルリ船へ乗夫々追々船に乗異人皆乘畢て又樂を奏しなから致出船候

一、應接間奥ニ八疊敷程の所あり其次の間に大廣間其次に小間あり其次は玄間なり

奥の間は我井戸林兩奉行組頭松崎外ニ通事計入彼のヘルリの大將分四人之由次之間の我與力之類彼か上官之者三十人余入候

一、上官之者迄之饗應茶菓子多葉粉盆夫々酒ミリン肴吸物モリ合入り身之由其外の菓子計にて酒樽の十本余九年坊箱數十彼の舟へ贈候由

一、四時前彼を舟一艘參り御幕張御嚴重に有しを懸念ニ存候間御取はつし被下候様申來候付上之分御幕張成丈ケ御取はづしニ相成申候

一、彼人物丈ケ高く人柄よく上代之風有之候又ケヘル調練樂調練も隨分出來候か軍令は立不申者と相見へ申候尤禮義の無之國に御坐候

一、應接之儀の大きに穩便之由其趣意のいまた審ならず候へ共只今之處

に而の先御國威をもたさす候而穩便に取扱ひ有之由二時計之應接にて相互にわらひ候而別れ候由委細の追々申上候

一、今十一日彼人多く横濱邊へ葬候由

十二日付

一、十日應接之儀先只今之處通信交易之名の無之趣意之由又兵端に及候勢も見え不申候併彼を献上物有之我も贈物有之位を而退帆に及ひ候勢之由

彼を献上物有之我より贈り物有之候への名がなくとも實の信通にあらずや

一、右應接之節彼より種々書取いたし難題申懸候積々相見候處我より先をとり此義の取上候か此義の取上かたき段一々爲申聞候故か彼可申張筈之處穩便に不申立相濟候

一、十一日黒川彼之舟へ罷越種々懸合有之此をそろく手事にて穩便に

相濟候勢と相見え申候

一、十一日ハッターラにて羽根田邊迄所々測量いたし候由

一、十五日頃には献上物を應接場へ指出度積之由また然との分り不申候十三日付

一、十日應接之節眞田侯小倉侯之陣取を寫し又人馬山形家宅杯を寫取又彼之姿を我方へ爲寫候由浦賀與力香山榮左衛門咄し

一、異船應接之儀始め香山榮左衛門儀は昨年々へルリ習染有之故再三懇志に及候ての如何と同人への御臺場御用之方へ向き組頭一人下役取計ひとして與力中嶋三郎助近藤良次二人被仰付右組頭異船へ罷越浦賀前乗越し江戸へ向き走船仕候事國法に背候趣申聞候處へルリ申候の日本國法の其王の都へ参り候方國法にて候則何れの御時代唐明或のヲランタ等來朝之砌の右京師江戸鎌倉等へ被召候例有之候却而彼方日本之舊事より委敷候由其後井戸林鶴殿是等之人參候處林の儒家故哉敵船之武備恐懼之様子に而一向用にも難立鶴殿も同じく武備にのまれ候模様にて

中々ヘルリ手ニ合不申候又々再ひ榮左衛門へ被仰付榮左衛門も無據前以書簡等送り夫々乗付ヘルリへ對面仕候處なし有之故大ニやはらき榮左衛門止候て江戸へ參候事ハ可相止併し浦賀へハ不歸由申候趣左候ハ於此邊場所見立應接可仕趣に而彼も見分に出別紙之圖面へ陣場いとみ應接及候 皇朝ハ被仰付ハロシア同様三五年見合セ可申由ヘルリ申候にハ慥成事約定無之引取候事は思も不寄是ハ戰爭好候にハ無之候得共彌許容無之候ハ敵々之間其ゆるんハ先年アメリカ漂流船四艘迄打拂はれ候薪水に乏敷窮し候船を打拂はれ候段不仁是ハ甚敷ハ無之此度睦ひ候への其恨も無之候得共左なき時ハ敵々之間故其不仁之罪を糺すべく杯と申候趣且又愈交易御許容被成不候ハ一日も早く歸國いたし度其趣ハ今度後詰として未敷艘のあと船參り候筈故手間取候へハ是迄是非可參左候への夥敷費事故あく濟候ハ右船出帆を留申度由申候今度ハ陸戰之心得にて陸戰之具多く致用意候由劔ヤリ等數本有

之槍ハ一間柄ほど有之

十四日付

一、十一日黒川彼の船へ罷越交易之分不相成段申聞候由彼方ハいまた返答無之様子通信之儀ハ如何哉相分り不申候

一、應接方評義の沙汰彼の願筋ホにそ取上ケ不申而落付兼候は必定候への交易ハ不相成候得共我が有餘之物を彼へ賣候事ハ試として二三年ゆるし候積り又彼よりも二三年被成候而御不益候は御斷り被成と申彼か方にも不引合候得ハ御斷申上と申候由右ニ付場所一ヶ所彼へ申候積り其場所は伊豆の下田か宜と申仁も有之又長崎か越後のなにか申處が宜と申仁も有之由長崎か越後と申趣意ハ始終ハ彼か氣に入不申候左候共江戸の方への直ニ參り兼候故之由右ニ付近日林井戸又は江戸表へ罷出御評議可致積之由右之義實否ハ申上兼候得共承候儘申上候

一、黒川杯ハ此度之處へ加はり候上ハ是非なき事なり連も無難に江戸へ歸候事は六ヶ敷いつれ神奈川の土に相成候歟又ハ彼に生捕られ彼國へ

行き候歟二ツ之内と申居候様子併黒川とても右評議に洩れ不申仁と愚察仕候右等之人ニ而應接有之候への兵端に及ひ不申候得共其丈ヶ之處置ニ相成候の必定と奉存候何分にも今暫之處大機會と奉存候

一、十三日應接場におゐて暫應接有之由黒川のミ出張其節彼申候の願望之處成就いたし難有と挨拶有之由右様に候への彼か方にの望之處成就致候と心得候様子ニ御坐候我方にはいまた何とも御評議不定只彼か死人を葬り彼か献上物を御取上げニ相成候との事ニ此上相應の被下物の有之由併此義の被下計にての彼承知致間敷様子ニ御坐候夫故此頃の御評議一体あらず様子御坐候

一、中島浦賀へ歸候儀の此間彼の舟へ應接に罷越候節通詞與山榮之助罷越與力よりの通詞相勤其上自分何か彼の方へ色々申候由與力なにを申と尋候への私言を申候と答候故左候の、最早歸り候と申候へのまた少々御用残り有之と申候左候の、可申述しかし御用とは何事そと尋候

への何のかのと申て其趣意を不申由依之應接方與力組頭へ罷越通詞之者我言を彼へ通し彼の言我に通する迄の物ニ然るに別に色々申候而の私共相勤り不申候間此以後の辰之助を通詞に可被成下と申候への夫にの種々譯有之且榮之助はアメリカへ直に通詞出來候故彼方にてても用便早き故喜ひ候様子故替る事の六ヶ敷由右榮之助自分に申候の井戸林杯の内命有之其儀を通候様子御座候

一、應接方與力中島三郎助は通信交易之事を惡ミ候様子相見え申候夫故か浦賀へ歸候而いまた神奈川へ出張不致候何か議論不合様にも相見え申候大方此頃の評議は氣に入らぬ故かと愚察仕候中嶋咄に通信交易の不宜と申候の實のガマンあり其ガマンの宜處が即義ありと申候又此間指上候或問追啓の中島との咄に御坐候夫にて中嶋の人となりを御承知可被下候應接方ニ而一人と奉存候併香山か出候への中島の不用中島か出候への香山は不用者と愚察仕候當時應接之勢御推察々々

一、二月十八日右等之次第にて過日福山侯の御應接との懸隔之儀ニ付 公御憂勞の御餘り急度なく福山侯臥内之寵臣藤田與一兵衛迄内談致試候様師實へ被仰付候ニ付此夕福山侯の後宮へ參上して與一兵衛ニ逢ひて去日侯の御對談之御次第を御疑惑あつての御尋問に無之候得共何分應接方は頻ニ交易通信御許容無之而の彼等承服仕間敷と申説のミ大に行はれ候趣内ニ神奈川邊へ遣し置候探索方を相聞え候夫ニ付深く御案し思召候の應接方之面々表向閣老方への品能く申上置應接之上に臨ミ無餘義譯を以御許容之運ひに取計候事には無之歟萬々一さる次第に相成候而の上下御同心にて御許容に相成よりも御不都合の次第に可相成歟此邊如何之實況候哉與一兵衛か知りたる限り將考量の筋もあら承り來るへしとの御内慮なるよしを申談たりしか與一兵衛暫く考へていつれにも御内々候へ伺ひ申すへしとて引入たりしか良ありて出來りて申けるの御内々申上たりしに 公の左程に御案勞思召御儀候への極めて機密の事への候へと廟議

の根元を御洩らし被成候よしにて元來今般の御措置の正論にて申候への誰かは快心に取扱可申泣血漣々不得止事次第にて實に不堪憤悶御義候へ共當今諸有司の勿論諸侯の内にも交易を唱候者有之又 御國威を示すへしと申者も有之評議般々に相成候故何分にも此度之處の只管平穩に御濟セの御廟算之由昔時候への献貢も御不納賜與も無之筈候得共前條之始末故御不聊なから是式之儀は被取計候由乍去通信交易之儀のどこ迄も御許容の無之候まかし彼も去月中旬々長々之碇泊失費も不少ニ付當年限石炭之儀は雜費の料の方へ被下筈尤於長崎御渡之御積之由通信交易の御返答の五ヶ年之間御斷之事の承伏にてもし其年限中に難船又は其他にも無余義譯にて食糧薪水石炭等蘭人を以相願候への被下置筈之由世上之浮説の種々難量候得共前件にて悉く水老公も御參謀御同意之上之事に候由尤應接方よりは一々伺之上取計にて 廟議と齟齬すへき事はあるへくも候はす兎角の義も明日の應接にて治定致すへきなれば今日の

處は先ッ此よしを御内々御答被仰進との御事なりきさて與一兵衛かいへ
るは異船も遠からぬ程に退帆に及ふへきやうに聞え候なりされと日限の
彼より前以は申出ぬ習ひにて二三日となりて申達する振合なるよしを物
語れり

一、御廟筭右之如くなりしに廿一日にの應接方出府して

營中も殊之外騒々敷廿一日廿二日の閣老衆の御退出も初更を過て事のさ
ま唯からす見えたり

又細作の密告せる趣も左のことし

一、五ヶ年の間長崎にて石炭食糧薪水等望の品與へ候由又五ヶ年後ニ至
り湊を開き交易等致候事のそれの其時の模様により相定候段彼へ申聞
候處彼致承知候様子御坐候又願之内湊を吟味致置度候の、其儀の勝手
次第伊豆なり越後なり致吟味候様相許候由

一、彼申候にの石炭等被下切ニ而の御貰ひ申かたく候何そ替を差上度と

申候ニ付左候の、他の物の入用無之候間金銀錢を指上候様申聞候由右
之儀の此度應接方の極意と奉存候先唯今之處の右之次第にて相濟候様
子に御坐候但是迄十九日朝探索

細作口達ニ云此金銀錢をくれと申事甚思ひ入にて彼方も中々澤山に
の無之様子されの夫は上げられぬと申それあれば石炭もやらぬと申
積之由又云此工夫手前免狀趣向倒れにて行不申事の末へ記す

一、彼兼而申候にの相分る事ならの一日も早く分り候様致くれと申左候
への一艘歸帆爲致度と申左もなく候への追々國元を軍艦差向候筈候間
其先へ指越度と申候儀右之儀のをとし候哉實事候哉相分り不申候

一、十九日應接有之處落合不宜二時計もかゝり相濟右ニ付明廿一日應接
廿日附方に而の組頭黒川外ニ御徒目付浦賀與力伊豆下田へ出張致候筈彼方の
ブカナン將官名軍艦二艘にて下田へ罷越候筈夫故下田ニ而も當月一杯の
かゝり候沙汰ニ御坐候委細之儀の明日迄に相分候と奉存候間明日御人

御遣し可被下候

細作口達書此應接不落合と申の應接方々下談之通り五ヶ年之間の長崎とやりかけ候處一向承知不致松前を望候由是の案外之事ニ而行詰り候へ共何分深き工ミ有之事と察候夫のならぬと申段々六ヶ敷相成候處彼々申候の夫なれは是非に不及兵端相開可申と申出候處林井戸餅の咽喉へ詰りたる如く目を白黒する計にて返答の不出甚恐怖之体ニ無言笑止千萬之体ニ付組頭黒川嘉兵衛袖をひき何分伺之上ニ可致と相談して此日は相濟由夫故先ツ下田見分と申處ニ黒川注を付候由此日ヘルリ初おそろしき顔色をいたし談し合ふての致返答候由傍觀人之咄之由

一、十九日異人へ御饗應の余程御丁寧之由

一、廿一日早朝井戸林江戸表へ罷越ニ付神奈川出立有之應接方黒川其外下役之者下田へ罷越

一、二月廿三日昨日鈴木主税出府して神奈川邊之風説事情大約細作密告之次第申上しに過日福山侯御應答之趣との天淵之差違ニ付
公も御慨歎之餘り猶又幕府の御内定を被爲聽度と今朝主税を藤田誠之進か許へ遣はされたるに誠之進かいへるの極めて御厄運指迫り恐入りたる御時態とのありにたり既に去ル十九日應接の節石炭の下さる間於長崎表可受取と申聞しに長崎は好ましからす候への松前にて御渡あり度と申ニ付松前の大名の國おれの此處にての取極めかたしと答へたれはさら願ふ事の惣てかないかたきと申ものに候への不得已事手荒なる取計にも及ふへしと申出せり此時應接方之面々勝手次第たるへしと衝き放して答へたらぬ善かりしに左のなくて一向に窘迫し言吃して出す漸くにして江戸表へ伺ふへけれの來ル廿六日迄延引すへし伊豆の下田は石炭の渡し場所として如何あるへき廿六日迄の暇に下田へ行きて見分セはよからんと遁辭せり扱廿一日に歸府して

幕府の御評議とありしか此等の事老寡君の一昨日初而承知いたされし故大に激怒を發せられ何分林井兩人之取計ひ以の外不宜候間應接人を取替へて成とも下田の勿論松前も難適候間何分にも長崎迄受取可罷出と説得してしかるへしも其儀不服にて彼を兵端を開き候へ、心力を盡して可及防戦と建言せられたり又昨朝阿閣迄内書を差越されたり其答への松前も下田も難免是非長崎にて請取候様申論さん事も舊名目の應接方兩人ニ而の難叶事故林井二氏の切腹にても被仰付輕易の應接に及ひたる罪を鳴らして墨人に謝し幸に長崎へも罷越夷情ニ通し且老練成筒井肥前守川路左衛門尉を出して先度の應接不行届の次第を一洗に取懸り可然との御事ありしにいま阿閣の御返答の無之よしにて御内書の御草稿をも見せたる由誠之進又云 公邊にても阿閣杯の此度の屈辱は致し方なければ今後におゐての越王勾踐の臥薪嘗膽の勢ならては難適と申おかれ候由候へと誠之進かおもふには臥薪嘗膽尤願は敷事に候へ共當今頻に膽薪を

被唱候ても目前之患を逃避する口實とありて詮ふし他日の事業に驗すへしといへるよし主税罷歸りて申上たり

一、此日 御内書御頂戴の御禮として御登城ありしか於 營中佐倉侯 堀田備中守へ御逢ありしか此人の何にしても當時兵端開けての適ふ間敷由を頻に申唱へられたりとそ其他營中の風説に筒井川路の兩氏の於長崎表魯西亞への應接は惣而御舊法を以て申諭し御國威を墜さゝりしに歸府の上御膝元ある墨利堅の御取計ひを見て大に驚歎せしとそ又一説林井二氏下田の事を申出せし兩氏杜撰の意見にあらて内實は閣老衆の兩人へ被命し時爲んかたなくは下田位のと何となく申されたる事もあれの閣老衆にての強ち二氏を咎め得ざるの勢ひなりとそ又一説ニ閣老衆下田の事をいなし申されしかの井對州左候はんにの應接の御免下さるへしと唯彼理と刺違へ候へしといへる故止事なく下田の事も許されたりとそ

一、二月廿四日朝福山侯へ被進たる御内書如左

前略然ハ風説に承候へり伊豆下田港へアメリカ船二隻石炭御渡場爲見分罷越候由左様相成候而り十分彼カ勢ハ益猖獗ニ募り實に

皇國存亡之分判 御當家御興廢の秋と切齒苦慮不啻奉存候機密之儀相伺候て必竟出位之多罪候へとも日夜御案し申上候餘り御内々御垂諭被下候ハ聊安心の途も可有之就夫又々申上度事も御座候間何卒被仰聞被下度奉存候御返答書御六ヶ敷候ハ、叔負可差出と奉存候下略

右御書を師實福山侯へ持參せしに已ニ御登城後となりしかハ老女花井へ渡し置て退出せり此夕細作密告如左

但細作出府於江戸表之探案ニ

一、一昨夜廟堂之御策伊豆之下田におゐて塗物之類反物之類鉄炮刀槍被下候積相成由右銃炮刀槍之儀ハ御役方々私に被遣御積之由右御評義相定候而昨夜林井戸出立致候由被下候銃炮槍ハ昨夜神奈川の方へ相廻沙汰承り申候尙々本文之趣御徒目付ハ出言之由承候間申上候

細作之者の口達せるハ交易品願ハ反物塗物ニて銃炮刀槍ハ無之由是

ハ年々被遣にてハ無之此度限り御役人々自分音物之由銃炮ハ三十目二十目十目三挺之由刀ハ白鞘之由二振槍も二本何れも鈍刀のよし何分下田にて交易ニ決候由黒川嘉兵衛下田へ黒船連れ行き彼是手間取其内ニ此表御評義相決候積之由

一、二月廿五日朝又主税を誠之進か許に被遣たるに誠之進か申處も愈下田に決したる趣にて松前の事も來年ハ見分に來るへしと答へんとの事にかりて最早挽回すへくもあらず廟議之趣も此度の不都合ハせんかたなし今後ハ屹度思ひ立すしてハかなふへからすといへる如く云ひ甲斐なき事になりたりと歎息せりとそ

一、此夕福山侯ハ昨日の御返答あるへしとて師實を召されて參りたるに例之與一兵衛を以て仰聞けられしハ今度亞墨利迦船御處置之事ハ於公邊も閣老衆御初一同御殘念にハ候へとも無余義御場合に差迫り水府老公御始御一同之御決評に有之よし初の